

行刊時定

特41

特42

127

特43

46

東京圖書總社

花柳演會

第四十二卷

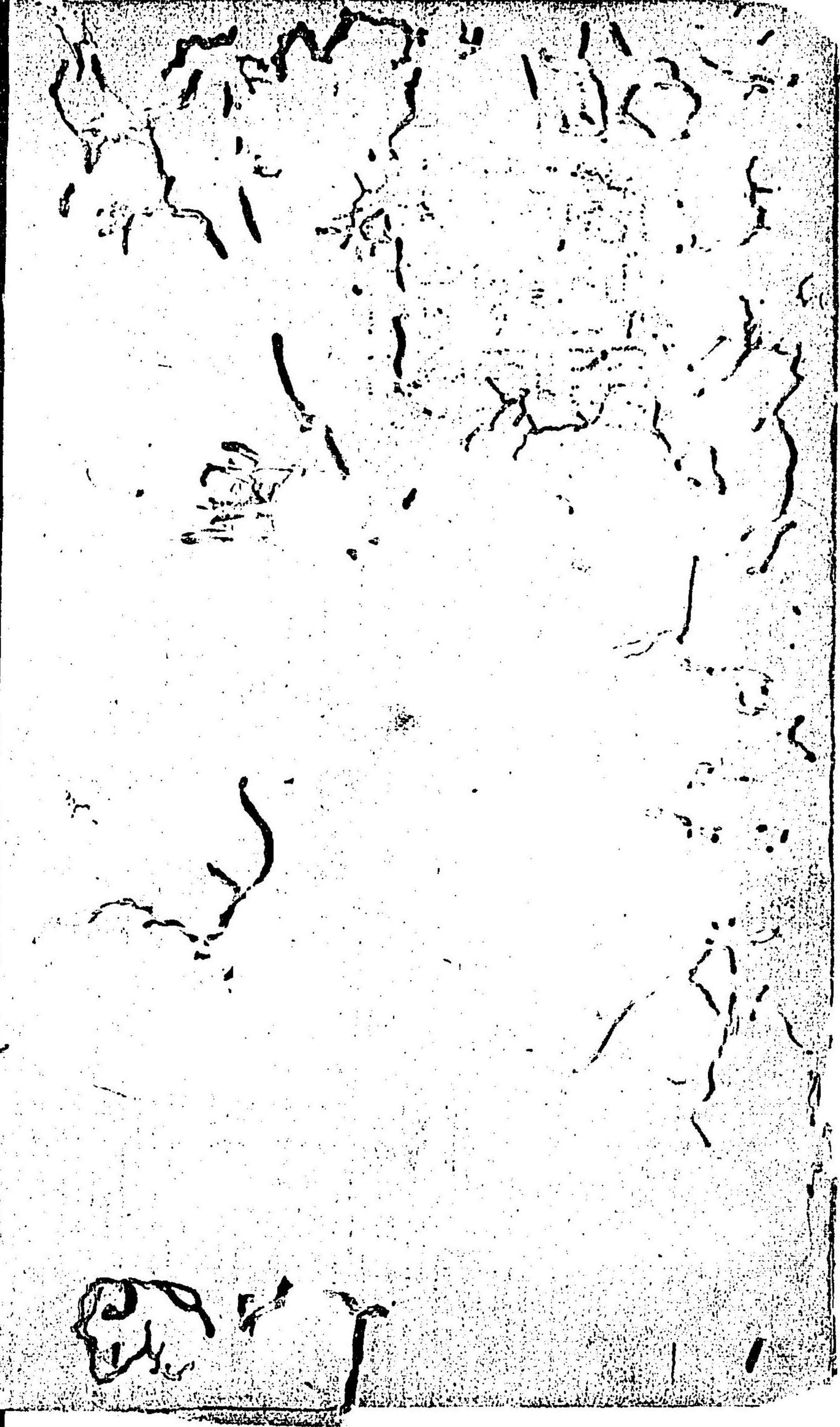
明治十三年九月五日發兌

竹天堂

○有栖川左大臣皇居造營論の大演説

目錄

毎月五日二十日發兌





明治十二年十月廿五日出板御届  
 ○一册定價金五錢の十册前金四十五錢○二十册前金八十四錢但遠國の此外は郵便税申受候  
 是迄賣捌所の中勘定金滞り候向の差送不申候間本社へ直段は御注文奉願候

東京神田區錦町壹丁目六番地

編輯兼事務主管 總生 寬

同所

飯局 竹天堂

同所

出板人 飯田登久

新規賣捌所

大賣捌

相州横須賀 大塚靜喜

横濱太田町二丁目川五番地

信州長野 小榊屋喜太郎

伊勢屋梅藏

總生

滑稽演說會第四十二卷

寬著

○有栖川左大臣皇居造營論の大演說 大内田照

近頃

内閣にて定額金節減の議起りし折皇居御造營并諸

省廳

の新築共暫く見合すべしと云論ありしと左大臣の

宮は

御席を起れて節減の趣意の去る事なごら皇居の御造

營迄

此に附て延引すべしとの勿体無き事ならずや抑今の

假皇居

と申すの古の某院某省の跡も非ず共結構のいか

は

美なりとも舊幕府の一族たる紀州の舊藩邸にして其

天皇

の臣僕たる華族の一人なるものを萬乗の尊

玉

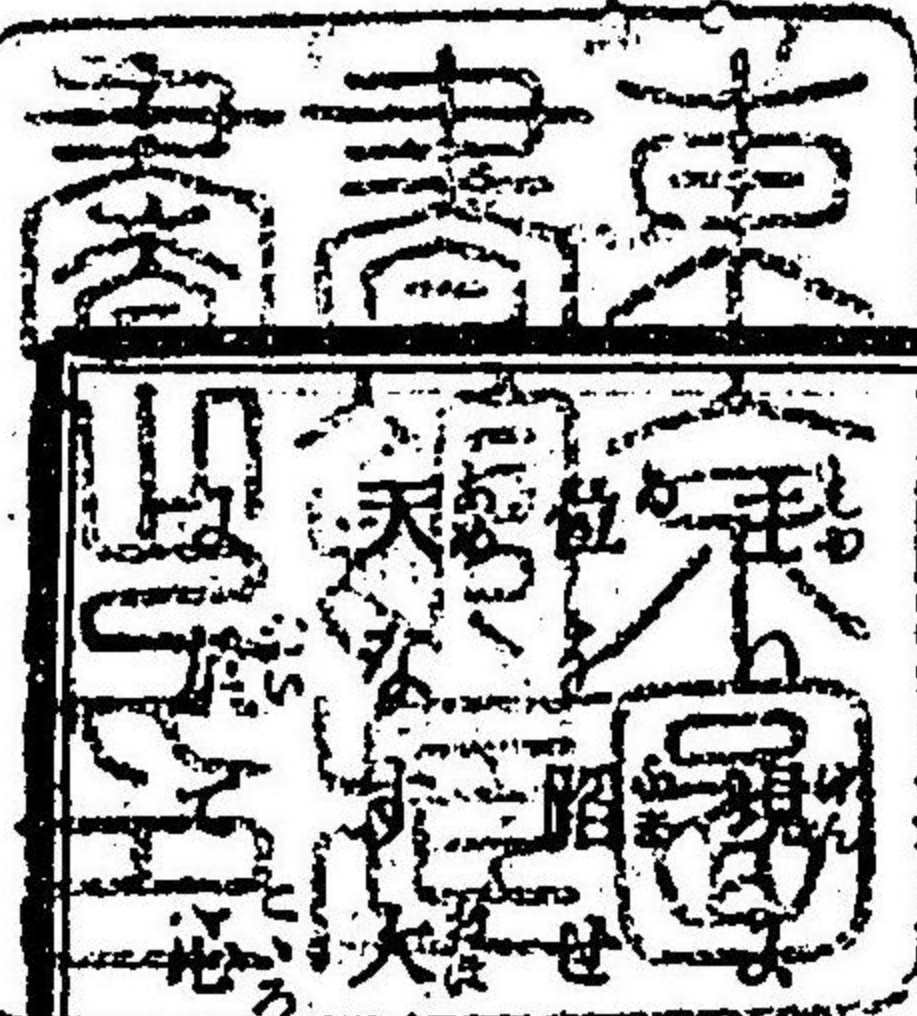
の御身にして臣僕の舊邸に御坐なさせ玉ふを

御心

の何とも思し玉のす共臣民たる我々の身

苦

き限ならずや若し又御用多端にして造營の費





領の出るも途なしと云ひなごて全國の人民も謀らせられざる我國少さしと雖も三千餘萬の蒼生あり豈皇居造營の費用を辨ずるも力無しとせんや畏し前の事の我々の口にすべきも非ずと卓を打て論ぜられしかご謀庶民も及ぼすなご有りての後々の施政上も差支えて面白からぬ事多かるべし聖上よ恐れ多けれ共今日節儉の趣意をも知し召させ玉ふ上なれば今暫く假の皇居も在まして追て壯麗なる宮居を造り成し奉るも如く事あし皇居の壯麗なるを見ずんば安ぞ天子の尊さを知らんかごの古き支那の帝家の事として我萬世一系の皇室も引き用ふべき言も非ずふご様々支え申すも同意説起りて竟も宮の御發議も其儘もふりしと東京日々新聞も在りましたと大小

の諸新聞の書き載せたりたりと雖も我輩草莽の微者と  
言へば漢語流の尤らしい高慢くさい四角ばつた事ハ米春  
さばつた踏んぼつた下主ばつた出まやぼつた欲ぼつた眼  
ぼつた息ぼつたえやつチコぼつたの類の如く何れも竹天  
子の好まさる所又此外の威ぼつたのさ張た等の事も餘り  
感心せぬ所なき例の横卒方へ紛れこんだが一体何の爲  
めにこんな役も立ねい事を並べたかど自分でも分らな  
くなつたから我輩草莽と言始の言葉へ立戻て諸手を組  
考え詰めて見れば私共とか己等達とかワツチとか僕とか  
拙者と身共とか某とかわしらアとかおらアとか言ふべ  
きを堅くろしく言たのを取消しの爲めの引き合ひ断し引  
出しも引出しが附き錠前に封印を附る如き重複再出蛇足



贅言と彼是又手間を潰しての相濟み難きに付本文又取掛  
りて彌山直り新規蒔き直し申始める時竹天子の如き  
裏店住居の宿賃一箇月貳拾五錢を拂ひ兼ね家主よ呼附け  
られて談し込まれ毎度面目玉の膏を取られる計りで油氣  
の有る者を食た事の無い貧乏の太政大臣薄命の攝政關白  
幅利かすの勳一等洋犬と伍をなす豚と親類附き合ひ三遊  
亭圓朝の前座ぼんた大人とすら同席をなす事能はず自ら身  
珍聞の化三君とすら同等の位置を占むる事能はず自ら身  
を無法の境に置き不里屈出鱈目の郷よ遊び我儘勝手の寝  
言を吐て毎度御客様よ御目溢しを装り御聞き捨てを願ひ  
眞平御免の鑑札を頂戴するを冥加至極皆様方の御厄介た  
るを甘んじて外の欲も無く徳もなく只一家一流の自主自

由を樂みよ此世を送るノホヤソホ、萬歳の才藏も宜  
くと云意句地無し的事なれば此卷の題號よ掲げだしたる  
事の如きの諸大臣諸參議衆の隠謀秘計でいなく又密策内  
談でもなくいと深遠なる廟謨高尙なる御評議なれば下  
賤の我々の得て聞く可き所よ非れば全く是が本當に有た  
咄が無い事か所謂道路風説か徳利の口おしやべつた事か  
壁の耳お聞た事か慥よ其本店却し見世製造所の根元を存  
じ申さずと雖もその名代の御用新聞を肩書となし正札  
となし賣高日本第一天お下よ比類無き色男蝶々鬚の小猫  
を生捕り専らふ毛の地開墾を任となし自ら下谷の御前  
様と言られるを最上の榮譽とする極の通り者垢抜けのし  
た様なしない様な物識りの様な物識ずの様な兎角高貴の



御最負澤山御髯上等の位置を専有したる御方の雲井も近  
き維盛卿よりも女の子に思ひ附かれる所の受け合ひ難し  
と雖も御自分様の方から寵愛する大先生が眼を通して載  
せた新聞も有る事だからよもや間違ひもあらずと人の鴉  
が落着て餌を拾ふ處を見て雀の下りると同じ事儘あ人を  
當てよして外れたら幾重も御免を蒙り奉ると自ら無調  
法の相場を附け御詫びの逃げ道を拵て先く上くの又上の  
最上飛切り官員様方の奥座敷たる内閣も於て有栖川の宮  
の仰せらるゝ事も附て諸公の御見込みと相違の次第の有  
た事と假りも断定せずんば此四十二號の此で立消ぬとな  
るより外言ふべき事となし論すべき廉がなし左すれば認  
本文三枚表紙一枚都合四枚を以て定價五錢を頂裁仕る譯

に相なり兼升から先々有た説と極めを附けて以て此皇居  
御造營の是非節減主義の當否宮の思召諸臣の異見共々精  
密の器械も掛けと言ひ、新舶來の四百倍以上數千倍の顯  
微鏡でも有るかとの思召之有るべけれどとも矢張り竹天子  
が分別を以て杓子定規の評論を飛び出させる事左の如し  
毎度竹天子の云ふ事肝心の筋よりも新道や抜け裏切り  
通し墮道釣橋富士の人穴飛鳥山の洞穴と兎角餘計な事へ  
計り翳れ込んで何ぼ滑稽でも演説と云字へ對して相濟ま  
ざる事謝罪致し兼る場合無きに至るが故も此度丈けの  
ツバ抜き闘試合出合ひ頃の鉢合せ夜這の生醉が臺所の皿  
小鉢へ蹴躓た様もドタンのバツンのカタカタは是れはし  
性急股立ちを取る間も鉢巻きをずる間も足袋の紐を締る



間も明た口をすばめる間も御店者が床も這入る間もシ  
ンくビヤの沸騰する間も石炭油へ火の附く間も消極積極の  
出合う間もなく直様本論も取掛り本理を述べ本當の未  
附けるいと易き事なりと雖も言ひたい事計りを言ひ辨  
したい筋のみを辨じ尋常一様の學者先生書生から經  
上た生一本酒ならぼ地廻りの麴臭い處肴ならば鱈の煎附  
け菓子ならぼ黒砂糖の下物同様素人の口へ入れ味の物を  
食ひ附けねい腹への合うかも知れねいが池田伊丹の古酒  
を未だなりとし白魚の茶碗種を腥しとし風月堂の極製饅  
頭を猶不可なりとす如き通人社會意氣不境界之を瀟灑  
と唱ひ淡泊と稱し妙の場又至り玄の地又達し自然の域  
入り造化の眞を窺ひ天地の心を知るの上等社會へ對して

眞の味ひ無き言を吐くも忍びす只く論理の筋書をなし事  
物の本讀みをする計りならぼ大新聞の論説書き雑誌やの  
記者其人のどの社も五人や十人無きも非ず此は是れ洋  
書を讀て洋人の口眞似を其儘又擔ぎ出さへすれば事の  
足りる筋年が若くて勉強をしさへすればこの子僧もも  
小旦那もも脊なアも叔イもも甚六もも所謂階の黄い書  
生もも驅け出したのへコ帯もも出來る事で天性の才も風  
も度量も徳望も決して入る事トやアねいから常体辛抱人  
理屈家通來の人青錢五ツで一錢の人文久二ツで三十の御  
方判任の月給を取て官員の積まなり仙臺平の袴も縮緬の  
着物金時計を襟へ掛けて帯へからみ頭を一廻りぐるりと  
廻して懐の中へ入れ猶積極の三ツへ扣へ紐を附けて置く



如き可愛らしき御坊チヤン方の爲る所にして世間の人  
馬鹿と定價を附けられマハカと折紙を受け變り物と表題  
を命ぜられオツだよと下げ墨笑ひをさるゝ竹天子が如き  
者の持前も非すと雖も此度丈けのズツと沽券を下げ揚代  
金を安くして常体の格式も従ひ凡庸の成規を奉し第一  
筋目の分るを主とし演説と云字の顔を立て第二の持前  
の長談議調子外れの戯言を取り撒げて以て滑稽と云字  
背かぬ積り候得共持病の事なれば我身なごらもごうな  
るか其時の筆の走り言葉の驅け出し機で裁紋切り形通り  
み行くか行かざるか豫め受け合ひ兼升が先く一旦の處  
夫として理屈勝ちの件を御覽に入れ升が是迄も悪まれ口  
を利いたり欠びを頂戴したりするよ於ての少く草臥の加

減ふるも非る故一兩日休暇をしてかゝ申上さく思へとも  
夫での御客様の御退屈の程が氣も掛り遊で居てもゆつく  
り出まませんから力一杯根限りぎりく決着の腕前を揮て  
直も皇居造營の一件も附き諸臣の思ひ寄りも於て今我  
大日本との申ながさ國士の廣さの小日本として世界各國  
虎の如く獅々の如く狼の如く鯉魚の如く隙が有ら一口は  
頬張らうとそる赤鬚連と交際をそるが故も表向きの處  
眼鏡橋を掛け瓦斯燈を立てステッキを持洋犬を牽き連れ  
巡査を置き蒸氣を造り検査をふし梅毒を驅り博覽會を催  
し日曜日を休業とし法律を研究し學校を建て五層の家を  
築きシンくビヤを飲め牛乳を吸ひパンを食ひ耳ペン  
挟え馬車の馬も眼鏡しを附け公園地も樹木を植ゑ十二時



よロソを打ち諸商買より税を取り印紙を張らせ戸籍を改  
め徴兵を定め晦日よ月を出し大の月を三十一日とあし  
を延し巻煙草を加へ新聞紙の發行を許し禁獄罰金を用ひ  
民權を取り鎖め國會の天頭を押え附け集會の條例を達し  
電信を盛よ張り人才を登庸しホシヤリを免職し米相場定  
期賣買を十月一日より許し上野の摺鉢山よ於て雇人請宿  
の養子某と楊弓場女との情死死よ傷ひよ療養を加え子細  
の有る無しよ拘ひよ不意よ待合船宿よ巡査を踏み込  
せて戸柵を明け天井板を覗き椽の下をかき廻し下駄箱の  
蓋を取り除け戸惑ひして夫妻の同衾を取り糺しよ及び猶  
相對相惚をさし向ひ互よ眼と眼の傳信器あつちよ思へば  
あつちよも魚心あまや水心出雲の神の縁結び眞の戀路の

濡れ幕よ二ツ枕を證據とし落ち散る鼻紙よ廉目を附け和  
姦も得心も言ひ譯を聞き入れす暗い處に留め置て無理往  
生み淫賣となし若し其罪よ落ぬ時の幾日でも差し留め置  
さ夫が迷惑さま覺えぬ罪よ口書爪印させるが如き無法の  
事なごの今の世よ決して之無しと雖も萬一左様の事なご  
あらば人々自由の權利よ防害をなごよ至る故よ右等の如  
き御用よ託して亂暴の所業等の我明治の御代よ於て急度  
之無き事い儘よ保証する所なりされば世の中よ右よ類似  
の謗り事なごあらば是れ必ず下々の族我々如き者共の思  
ひ違ひ申誤りよして聊も御官員様方の御取り計ひの悪さ  
よ非るなりよ痛くない様痒くない様甘くない様辛くない  
様跡の萬々皆様御察しとして大筋の所よ立ち返り今政府



よ於ての色々様々文明開化の手順手續き遣り操り算段無  
間体人の前惡からざる様外關の善き様取り繕ひの眞最中  
なれば建築だの造作だの器械だの匠教師だのと買ひ入れ  
作り立ての物入りの中々以て生大體常一通りの事又非ず  
さればとて是を省て只儉約計りを主とし藁屋ぶきのステ  
ンション掘立て小屋の藝祝廳丸木の兩國橋土橋を永代の川  
へ掛け手習ひ紙でフヲホを造り粘土で鉄砲玉を鑄散り運  
華をハツテ一テの代りよし提灯箱へアメリカ砂糖の俵を  
結ひ附けて兵隊又春負いせ帽子の代りよ味噌澀を被り洋  
犬の代りよ土鼠を引いて歩行時計と見せて拾文の御備を  
襟へ下げ長竿の先さへ巡査の手灯を差し上げて招魂社の  
燈籠の積りよ心得る筋よも参り難し若し其不体裁な事を

嫌はず見込の惡さを厭はず只手輕お仕方計りを目的よそ  
る時ハ田舎親父や山家育ちの若いもの位ハ左程氣よ掛け  
ねいかも知れねいが工夫の上よ工夫を凝らし考えの下よ  
考を用ひ鞘の中へ鞘を込め袋の外を風呂敷で包むが如く  
萬事萬端抜目無し處か善よ善よ善を加へ美に美を盡したる西  
洋各國の者よ見ふる、時ハ馬鹿と思ひを問抜けと見ふる  
野蠻未開と侮ふる、ハ必定あり左それば我國をして人並  
まの附ぎ合ひをせず不禮を加え不法を行ひ何様の亂暴  
狼藉お事を仕掛けまいものよも非ず若以の外の無理非道  
不義不仁残忍苛虐をされるよ至りてハ其儘よして置く事  
能はず打ち拂ひよ及び追ひ出しよ掛り終よハ軍とあり喧  
嘩とあり萬國公法を擔ぎ出そと雖も魯西亞の土耳其よ於



るが如く英吉利の印度も於るが如く那破翁一世が隣國も  
於るが如く耶蘇の舊教派が新教も於るが如く秦の伯起が  
趙の降卒も於るが如く清盛の源氏の殘黨も於るが如く強  
い者の爲めおのごうされても決してグーの音も出る事能  
いす償ひ金を取られ夫役も使われ全國の人盡く懲役同様  
の姿よなる時、錢が無いの米が高いのと言つても中々今  
の有様位も難澁も非ず別品の殘らず、バア／＼の權妻よされ  
飯炊きよされ男の殘らず三助權助誠の奴隸沓を背負て供  
をそる大ボンの垢を管め馬車の泥を掃除する位ならば未  
だしも我慢が出来かもある知らねいが拾貫目の力も百貫を擔  
がせられ一尺の手を一丈延ばせと言ひ五十馬力の蒸氣釜  
を腰へ附けてヒマヤ山の絶頂も登れと云ふ如く無理無

體をされる共一言片句の恨ふ足と言ふ譯ももならず其儘  
よなりて千年も萬年も億兆無量の果迄泣寐入りの有様杯  
よ及ぶ時の壓制も束縛も澤庵漬けも板挟みも申  
續のない時節も陥りての言語同斷なる故大體の我慢なら  
ば外國の體裁と並べてひけを取らず馬鹿もされねい様よ  
ペンキで塗り煉瓦で隠し瓦斯燈で光らせ提灯で賑かせる  
方が上の上策謀の免許智略の奥の手なる故も皇居等の事  
の先づ天子様の入らせらるゝ御所も無いといふ譯で  
なけりやア跡廻しよして兎角西洋人が通り歩行處の道筋  
や尙かの一番よ眼も附く場所其外實地も附て入用の器械  
等を拾ひ立てるの肝心な事故も内裏の新御造營の當分の  
處御見合せ有て然るべしと之有りしを皇族もして陸軍大



將と左大臣を御兼帶の有栖川の宮より以の外の思召コハ  
消しからぬ事を聞くものかな孟子云ふ天下の爲め其親  
より恐れ多くも畏くも一天萬乘億兆の父母天地開闢の時  
よりして御先祖代々白し召さる萬世一系神の御裔の御  
主敬聖文武の今上皇帝の宮禁玉闕の御造營を只一通りの  
事と同一視して儉約の爲め節略の爲め省減の爲め杯の言  
ひ立てよ遣ひ見合すべしの差扣へて宜しかるらん然る  
べくぞ候らひけるの尤もこそ思ひけれのどの事の輕重を  
知らず物の取舍を辨へざる次第の五の空論ハ一昨日言  
して牡丹餅と一所又棚へ揚げ内待所の御鏡と共錦の袋  
へ納め速よ御造營の着手をなし墨金を當て繪圖を引き地

形を堅め礎を居え柱を立て屋根をふき壁をぬり天井を揚  
げ席を入れソウタンを敷き椅子を并べ姿見の鏡を立て硝  
燈を釣るしガラス障子を嵌め長三洲の額を掛け西郷南洲  
の一軸を掛け頼山陽藤田東湖佐久間象山頼三樹三郎高山  
彦九郎蒲生君平林子平本居宣長加茂真淵平田の理窟千蔭  
の書有功郷の歌楠公漆川の油畫兒島高德天勾踐の像を始  
め荷も王事の爲め有名の合作ませ張りの屏風立を拵  
へ御庭の植物泉水岩石より秋の月春の花雪の詠め風見の  
細工雷避けの柱衛士の焚火守門の兵隊清涼紫宸大極殿右  
近の櫺左近の櫻矢大臣より左大臣萬事抜目の無き様よと  
迄よ仰せられずとも随分結構を盡して御造營之無き時  
ハ聖上よハ明日月よ并び仁愛天地よ同き故露程も慮



又掛させ玉のすども臣子の身も取りて之を餘所眼み見  
 なして等閑も過ぎ去るべき理なし去り乍ら大藏省が手薄  
 金庫も有餘なしと言ひ今我大日本國の日本魂忠義の肺  
 肝萬國も比類無き人民三千五百餘萬の有志者へ此段を相  
 談及びなばよもや不得心なるもの一人も有るまじ必ず  
 畏り奉るご御受け及び庶民子の如く來りて靈臺を經始  
 する通り日ならずして秦宮漢殿玻璃の帝居龍動の王城よ  
 りも壯麗なる造營を成就なす事疑ひ有るべのらざるを思  
 りすして只大藏の有る所を國の物とし公庫も儲ふる所を  
 上の物との心得るの何事ぞと仰せ有りしと諸臣の思ふ  
 所より右の次第第一通り御道理有る様も候得共今我國の政  
 法の下へ相談協議及ぼ其上も在る者計りの見込み

を以て大小輕重共何事も寄らず斷定し來りたる例なるに  
 若此事を御相談有らせらるゝ時は是迄の仕來りとい大  
 相違を起し其他の事迄も下々より口出しをされ察當を受  
 け役おも立たぬ言ひ草を持ち込まれなば甚だ官員の威光  
 も拘り貴人の權勢も關係するの幣害なご有るも及ぼ  
 さらぬだも參政の權を望む請願者流國會派の流行演說會  
 の蔓延する中なれば此議決して宜きも非ざるなりと云様  
 な事も言ひれたのか言ひれないのか慥より我輩も分り  
 兼ねると雖も先々是迄の例も見本が無いから人民へ相談  
 へてなして然るべしと云人計りなる故宮の御發論の  
 行いせられざる様も聞き及び侍るが今の世の眞の儉約と  
 云譯も非ず眞の阿房宮を作り酒池肉林長夜靡々の飲と



いふ時節も非ず或の官員もして一日五千金を擲ち能狂  
 言を催し新聞屋もして千金を花火の煙りも打ち揚げ相場  
 師もして解停の祝盃を向島の八百松其他の敷所も開て東  
 京中の藝者の物揚げをそる族も有り儉か吝か將た無暗か  
 山師了簡か殆んど解そべからざるものあり今一圓も五六  
 升の白米を食て平氣な顔をそる裏店社會を見ても昔の困  
 窮とい同日の論も非るを知るも足りても足りぬいでも宮  
 殿を造營の事ハ國も金が有ても無くても外々の振り合ひ  
 諸官員諸華族の體裁も准し夫々相應天子憐の天子機程  
 の御住居を遊させられ候て然るべき事なり華族諸家杯と  
 違て我王室ハ覇府の爲め困められて譯山の金銀を是迄  
 御貯ひと云筋もあらざる故是非共國庫より費用を出し國

民より其徭役を勤めずんば十分の御造營ハ成るべからず  
 何事も分相應を以て物の適度とするが故も過ふ及なき様  
 も能く其見積り取り計ひをして外くの並合よりも見苦し  
 からざる様驕奢も過ぎざる様も仕りたしされば諸臣の説  
 も理なきも非ず宮の思召も御尤なる次第と淺く申演るの  
 竹天子の持前も非ずと雖も惜い哉據ない哉是非ない哉  
 紙數も限り有るゆゑ代價も定め有るゆゑ先此所もて結局  
 と仕る代りも此大さの四十三號も於て日頃の手際も百  
 倍増しの演説仕候間何卒出板の日を御待ち下されたく候

○總生寬著述の廣告

○命のせんたく

定價十錢 一冊既も出板





總生 寬編

清俗演說會

第四十三卷

目錄

每月五日二十日發兌

○三條太政大臣評判の大演說

明治十三年九月廿日發兌

竹天堂

○是非娛樂  
右の人間樂みの最上たる事を綴りたる無類の新作也  
定價十錢 一冊既も出版

○滑稽政談  
右の現今の事を於て天下國家及びひ一身上の是非得失  
毀譽死生を關係する條々の裁判をしたる珍奇の書也  
定價十錢 本月十五日出板

○滑稽演說會  
右の明治の世今日の政事向きに於て大目的とすべし  
方畧の古今無類前賢未發なる新説を竹天子が例の奇  
筆を揮て書き著したる者なり

○滑稽演說會  
○溜取り分けて廣告仕候の滑稽演說會の儀毎月五日二十  
日兩度發兌の處新作の附録發兌の節の一回發兌仕事も  
有之候得共決して怠惰の筋より無之候故此段縁々申上  
置候



總生寬著述廣告

○是非娛覽

一冊拾錢本年八月十七日發兌

右の現今の事よ於て天下國家及び一身上の是非得失毀譽死生又關係をる條々の細論又裁判の言葉を加えたる珍奇の新書なり

○滑稽政談

一冊拾錢本年九月十五日發兌

右の明治政府の外よ一種の政事法を書き著したる古今無類前賢未發の新書よして實に鬼語神論と謂つべきものなり

○取分けて廣告仕候の滑稽演說會の儀毎月兩度發兌の處此度より毎月十五日一回宛新作物發兌ニ付其都合よより演說會を一回發兌仕る事も有之候得共決して怠りの筋よの之無く候故豫め申上置候

總生寬著 滑稽演說會第四十三卷

○三條太政大臣評判の大演說 場唐四位 掛まくも畏くも憚り様ながら失敬あが不調法あが申 兼る事なが奴鳴り兼る次第なが書き悪い譯ながら相 場の附け悪い事ながら面とも小手ともお胴とも榊原謙 吉宮本武三四牛若丸も宜くともいひ兼る仕兼る遣り兼る 食ひ兼る見兼る聞き兼る脊負兼る蹴飛し兼る彈き出し兼 る砥め兼る握り兼る屈き兼る行渡り兼る廻り兼る死よ兼 る生き兼る兼るくで彼は一へし計りの紙幅を塞げよか ら早速三條様の御身の上の物浚ひ御一新前の所ハ皆さん 御存心近世史略の方へすつと大負けよ譲りて置て明治元 年以前の事も少々爰よ書かざるを得ざる手續き橋渡し萬



延二年八月十八日諸藩の兵士御所の九門を守りしは長州藩の其宿衛を解き三條さん東久世さん等の七郷と共に本國に還るに附て既仰せ出され夷狄打ち攘ひの御評議一決御親征と事極り有栖川親王を以て大將軍と迄御定め有らせられざる事此長州騒ぎの爲は御見合せ此日中  
山さんが兵を大和から起して五條の代官を殺し之を天誅  
黨と稱し殺され者計り誠は早御氣の毒此時のどく  
ぶされ損蹴られ損ごの馬の蹄は掛ごの下駄で踏まれ  
やらごの轡禪で金玉を締められのやら一向めちや苦茶  
の蒲鋒や只そつちでもこつちでもドクハクハク敵は立る  
計りで誰が大将ぶう何が譯柄ぶうちつとも分らないなが  
らも命をおしふる者もあり惜みられないもの澤山な殺伐

世界元治元年七月十九日長藩が兵を引て京都へ来た熊坂  
が鉄炮を擔いて金賣り吉次を劫かした石川五衛門が梅が  
谷のサアベルを蹴つけて召捕られさるがさらつ油揚を  
天上界へ持て行て天獄羅見世を始め石垣の間から蟹が  
顔を出して菊五郎の假色を遣は其十一月は尾張大納言を  
遣て長州征伐慶應元年は徳川の親玉モウ堪忍袋の紐の切  
きた斯うあつちやア誰が何と言うが腕の栗伽羅の承知  
ねい江戸兒を見損たかと將軍親ら大奮發十兩の大福餅を  
一口は頬張て戸板を下駄の代り穿き鏡餅の様も眼鏡を  
掛け鼻から提灯を出し口から火煙を吐き足の裏へ豆を出  
し額に瘤を拵へる迄も一段々先の方へぬたくり出した處  
の泰平の世の御家人旗本鈴木主水や本所の御家徳鼠小僧



の直侍小本の丹次郎權十郎の色男役半四郎の若衆姿より  
もぐよやくとるでも士芋田樂貳本さどといふ計りで按摩  
が杖を振り回そよりも役も立たねい天頭數江戸を出立の  
時から歸りよの淀屋橋の煙草入を四條河原の涼み臺天王  
寺の蕪西塔の武藏坊姫路の草細工廣島の藥鍬合の山のお  
杉お玉伊賀越の道中双六箱根山の湯本細工小田原の梅干  
大森の麥蕪細工高輪の牛車と持てる物も持てふい物も  
毛遠いよも近いよも足元よも眼の前にも拘りらば見當り  
放題に土産物を買込んで来る算段や歸跡で茶番狂言の  
種にでもとる心得の族なれば何かの以て溜るべき一發の  
鉄炮を聞いて腰をぬかし眼を回し膽玉を飛ばし居が垂れを  
こさ家來の生の難義を見捨て子の親の一大事を構はず具

一文右往左往蜘蛛の子を散らす如く砲屑を飛ばそが如  
く防長の國境から一足飛び紀州の若山迄逃げ延びてほ  
つと息を附く者もあり伯耆出雲の地方から一股さよ遠州  
濱松迄逃げ去て天頭を隠して居る者もあり是の慶應二年  
の六月なりしが將軍徳川先生大弱り弱り込み物を食ふ  
氣もなぐ眩枕をすする張りもなく話をすする根氣もなくうと  
くしほ只すやく御寝なつてあるとか思たら夫なりけり  
ハ勞む死よ最早此世も在る中から魂の離れた位の仕合故  
化けて出る意氣地もなく祟りをあす動さもなく誠は恙な  
き極樂往生跡に念を残す様な罰利生もなく引導もあんよ  
も入らねいで十萬億土へ籍を遷したと區務所へ届けを出  
したに附てい夫よ隨ふ譜代の郎等外様の面々何ぼぼん鎗



連討りでも空く軍の居残りも出来ず一同江戸へ引き返しの幕が明て一橋の親方今の駿府の隠居さん將軍の跡役を引き受け徳川座の座頭と極り内大臣征夷大將軍と任官の有る内々の恐れ引き替へ外國から英吉利佛蘭西鼻を揃ひ沓を並べ蒸氣船を漕ぎ寄せ大砲の腔を拂ひ元込めの玉薬を用意とサア何と兵庫の開港さうして呉れるまでくするに用捨り無いぞ手見せぬとのつ引きならぬ手詰めの催促ちつとも臆せず仮初ならぬ右大臣の若君かき首捻首にも致されず暫らくの御用捨と竹部源藏が春藤玄蕃に應接する様にやア往かねいで將軍職を辭退大政を返上し大坂の城に居づくまつてゐるかと思ふは何は大名でも縮みまつてゐらりよかのんしと塗り物の名産蠟燭の名代會

津の伯父さん焼蛤の本店桑名の兄貴を兩大將生田の森の柵ならで伏見へおその押し寄る去る程錦旗の軍勢十萬餘騎所の大名小名一同勤王と稱して旗を揚げ早詰来る薩長土肥前其外おまの強敵ヨハ叶のじと奥の手の逃るお勝ちと東國へ立ち歸りし服臣肱股數人を隨がひ江戸の城へと來られしおイヤく爰より附いでうさんな奴と見咎められなばお輕を渡そか渡さぬか位の事非ず彌朝敵の名を被り相馬の將門足利尊氏同様肩書きを附られちやア勤王無二の水戸代々黃門光國以來の忠節シヤボンの泡と消え果つべし安房やさうで有るまいかと勝先生其外の手元も居合と人々も相談なして本國の生息も故郷へ引き退き又上野へと恭順し髪も結ひ湯もあびすお酒



も飲ます女郎買もせず草鞋も作りすマツチの箱も張らす  
ニシン仕事の内職もせず歌もよまほ詩も作らほど一も  
唄のひかつ惚をも踊らす香水も附け尻もひらほ只ぼん  
やりと日を送る何おも同じ秋の夕暮と世間の夫なり泣寐  
入り又なるりと思ふと奥羽函館彰義隊今日借金のため  
墓印の唐銅を取り離されること知るや知らずや三昧橋五月  
の雨の其中よから紅の色をなと修羅の衢の戦争中なれば  
有栖川の宮の鎮臺府又在しませして餘類征討の御手配代て  
今の三條様が鎮將府又軍配を取りて座を構へ下知有る内  
よ會津落城奥羽平定函館鎮靜日本國中六十餘州全く泰平  
となほじかば第一番の勳功が有栖川の宮様だが是と別段  
の御方故人臣の列として論とべき次第は非ず百狐の玉草

薙の劔内侍處の御鏡仲裁の這入も券骨同様先仕舞置て  
申上す其次は功績といひ御家の株といひ公家衆様と言  
ひ三條様より貴き御方のなしさればよや法性寺の入道と  
同性でない御同職御同業御同役の太政大臣といふ人臣  
の最上極點の御位も居玉ひても西郷隆盛伊藤新平の如き  
人臣と雖も只一言のふ服もなぐ上告もなく保釋もなく謹  
で御差圖の程を希ひ候なりと低頭平身と有て幕下でも揮下  
でも家來でも子分でも弟子でもなく上役もして何れも尊  
敬し奉りし位の事だから木戸故參議も故内務卿元一藏さ  
んも今の會計免許取り扱目なしといふ大隈さんも井上さ  
んも誰さんも彼さんも皆諸共のいやみからみを陳る者も



なれ況や其下の奏任諸公判任諸君等外諸先生其他非役の  
華族區戸長郡の司免許代言勸解の日雇取りよ於て豈ニ  
シともクシヤともぬかす族わらんや嘲る輩あるべきや  
又況や今の新聞記者のクニヤ筆演説者のピク論千金  
丹の本家本元藝者の箱廻し獅子舞ひの跡足人力車の綱引  
さ角力取りのフムバシ擔ぎ精鋭水の燭集め寶丹の錫拾ひ  
道普請の砂利ならし芝居のトノボウ返り湯屋の釜前杉戸  
屋の七人斬り桂庵の手引き橋錢の番人葛西の糞取締御免  
の勸化法界坊武藏湯新門の辰五郎松島屋我童西京の加代  
今戸燒きの人形衆の平内根津權現船玉十二社大明神靖國  
神社參詣の人と戦死人の親類縁者よ於てをや太政大臣の  
御役目をすする事よ於ての誠よ此御方の御身分柄といひ功

績といひ御尤至極の儀と内よでも表向きでも申上てゐる  
おの相違ないが近頃世間の物識らずか譯の分らない族か  
知慧の足りない人足のいふ事だるうが三條さんの大きな  
智慧深い理屈強い働さ澤山な藝能の無く只ヌウと云たる  
御人物様で御布告の奥書を遊ばと計りの御達者なお方だ  
と云わへり竹天子今此風評を聞て不審も存せざるを得ず  
不思議千萬と申さるを得ず何は昔の御公家さんの天津  
兒屋根命の御裔でも猿田彦命の後胤でも三位中将惟盛様  
の御血統でも足利公方の遺れ紀念でも後徳大寺左大臣様  
の時鳥鳴きつる方の有明先生でも貞家卿の色紙紛失も掛  
り合の御方でも金銀よ於ての至て貧弱と申てはいいかだ  
から清貧なりと雖も雲上人と云人間界を出入る事數等の上



又位を御方の中へて第一番の大功をお立て遊ばしたる  
王政復古の首唱有栖川の宮様も次ぐ程の御方が只常體人  
并々御器量なるべき道理なし金銀でも珠玉でも熊の  
膽でも西郷従道さんの沓でも淺草の観音像でも高尾の身  
受金でも間男の償ひ金でも皆直段の高い物のさよか直  
段丈けの處がないといふ等なしと太政大臣の功能を急  
度申開きへ御當人様の御依頼無しと雖も竹天子引き受け  
て代理仕べけを其風評よ云處の何事よも深く御願着な  
御構ひなし御心配なしかと疑ひを抱く筋の征韓一件よも  
西郷連の爲めよ言論の鋒鏑を向けられず尋問の筋よも大  
久保川路と計り有て三とも條ともいふ者なく國會請願の  
黨よも非難とも御頼を申とも承りたる事よ見留め印を

して頂戴とも言ひれた事なし今我國の虎噬狼食酷薄殘忍  
其心底計り知れざる英佛諸國の向ふに在て獨立の孤島な  
れば五里や十里の鉄道を造るとも集會も餘例を立ればと  
て民権を全く與ひさればとて島津久光公が存生で居れば  
とてかな讀新聞の器械又廻り出したれば迎金納り米納り  
直さ小れば迎坊主に妻帯を許せば迎利子も制限を立れば  
迎神田祭りも出しを引摺れば迎柳北さんが病氣なれば迎  
書畫會の錢貫ひが流行すれば迎釣り錢が少ければ迎芝居  
の中へ瓦斯燈を引たれば迎スタンシの構内から人力車  
の定め相場が立てば迎其位の開け様でい世界第一戦争の  
命とす大砲の大坂出來の佛蘭西舊式唐銅作り計りで未  
だ肝必要とする元込めの獨逸流克虜伯砲の如きも持へる



事能いず皆彼國より買ひ入る次第夫も今試験中で之を用  
ふるか用ひざるか儘定まらず小筒と雖も木地の品物の  
外國から買ひ入れて磨きを掛けたり玉を鑄たり臺を拵へ  
たり蒸氣の湯を沸したりする迄の事で外國人の手を放  
雇ひ教師の厄介とならねいじやア一切の事の具足せざる  
有様なれば其大砲其外軍器も用ふる品々の名稱が西洋語  
のまへでメカニクスと稱する上陸砲あり横栓と名  
る砲底あり着發信管と云破裂丸の類俗語漢語を取り雜せ  
職人の言ひ習ひし日雇取り人足の符帳を採り用ふる因て  
萬世不朽皇國一定の名稱とするに足らざる故其方罷出  
手間取り人足となり何れも至當の漢語を施す様よとの命  
ありし故少々の日雇賃頂戴仕り日々午前八時より午後四

時迄軍器名稱附けの爲め出頭を始めたれ共固り懇張りの  
竹天子大食の竹天子食ふよめ足らず飲むよも足らば況や  
着るよも權妻よも地獄よも足るべき様なく至然と用をす  
るよ氣が折け張りが抜け精が緩み朝から夕刻迄顔の出  
ても居睡りと欠び計りユイから二番目人魂から附き合  
を受けさらな勤め振りなれば御用濟み付雇差許そとの御  
使を被り始めて糊飯程の給金束縛を免を今於て無事は  
相まやべり罷有り升れば白頃竹天子御最負の御方の御安  
心下れたく序を以て餘計な御披露仕候斯の如く未だ皇國  
の事よ於て安心無事昇平受合ひ萬々歳幾久敷と云時節よ  
非る故黙て計りぬられぬ筈言ふべき事の無い筈のあし  
然るよ三條様の世間聞えたる名言を仰せられた事も存せ



付卓絶ある行ひあらせたる説も知らず只三條様太政大臣  
 様御布告の奥に名のある方と計りて極上の智者第一の  
 勇士撰り抜きの仁者と申難しといふ人あれ共アそこが  
 一朝一夕通常有り来り只の人間凡庸の論者も分る事非  
 ず今竹天子が了簡獨極め他人は頓着無しの理を作て答辨  
 仕るは仲尼曰く無為而治者其舜也與夫何為哉恭己正南面  
 而已矣老子の虚無を主とし釋迦の寂滅を為樂となす何個  
 りふいを當て徳あり目操り札事のフキを以て利ありと  
 し孫子の無形を貴び周茂叔の無極を唱ひ曹參の酒を飲で  
 宰相の職を勤め天御中主の神の咳拂ひもせず手も敲かず  
 御茶屋の女中も呼ばず中殿もいじめ附けず只神有り云  
 迄よて天地開闢の御功をなし玉ひ我國人王の時又至り安

寧天皇より開化天皇に至る迄七世の間淵然冲靜政令簡朴。  
 其民皞々如無為之徳。不宰之功。莫能得而名焉。垂衣裳而治者  
 其在斯時乎。史の詞も見えたり百戦して百勝するの善の  
 善なるもの非ず戦わずして勝つは善の善なるものなり  
 どの兵法の奥義公事裁判お擔ぎ出して勝つに訴訟入費を  
 取ると闘も愛相づかしをして交際を絶つ損あり人中へ  
 顔を晒して争ひ事をするの恥あり口論もせず物言ひもま  
 ないよ如くいなし病を拵へて治すよりも始めから病無き  
 よ如くいなし病氣よなりて治れば治ても薬の代を損する  
 甘くない物を口へ入れるの害あり火事を出して消すの火  
 事の無きよ如くいなし若しばやくを出せば消し得たり共  
 垣根や屋根椽板をむしり毀やし皿小鉢を打ち破り御太儀



酒を振舞ひ御苦勞を申し廻る手數あり國事犯徒を殺し  
盡すの國事犯をせざらざる如くいなし若國事犯黨の  
起る有らば制し得たるも味方の死亡手負もあり金穀の損  
毛もあり其人の生てゐる時力及ぼざる所から堪へて  
ゐても其子の代となり其孫の世よなるか或は其人が病氣  
其外難儀な事の出来た虚も附け入て恨を晴らし意趣も報  
いる者あるに至るべし秀吉の息の有る内幼少なる秀頼  
の後見職を受合ても約束變改の家康老あり那破列翁が敗  
軍も乘して共ふよいじめ附けたる佛蘭隣國の例しあり勢  
を得た時よ十分の仕返しを同藩よえたる武田耕雲齋の餘  
類あり徳望と仁愛とを以て無事を謀るこそ最上飛切りの  
政法とも軍容とも謂つべきの澤山諭ひ話しの天道干しを

せずとも明々了々昭々灼々と理屈めいた事を御覽に入れ  
るの尋常の文章やの事よして竹兄の擔當する所よ非を  
と少々だれ込みの隠居文句の謝罪をして又候三條さんの  
御人體を手短く申したらば雪折れの無き柳の木如く助  
高屋の持前の如く昔ならば小松内府重盛風すつと古よ至  
て菅原の通真公中古の足利義政公四代將軍以來の徳川大  
樹獸ならば麒麟引掻くの害も食附くの毒もなし鳥ならば  
鳳凰喙むも攫むも手荒い事一切を好まず誠よ目出度泰平  
の吉兆聖代の嘉瑞魏徵が所謂良臣よして今上皇帝の爲  
めよ賀し奉り祝し奉るべき御家來様なりと存じ奉る迄の  
事よて世間よ唱ふる所の評説どの大違ひの相場外れ我れ  
此御方をさして柳流しの大臣様と評し奉るで御座り奉る



どいやに文章が縮かまつて来ましたから極仲て滞りなき  
枝垂柳川柳衣紋坂の見返り柳柳腰柳の眉柳生流柳下の小  
六柳澤彌太郎柳田正齋柳屋の蕎麥柳原の古着柳櫻の仲の  
町いつしか花もちりてつとんと北州千歳の壽話家の柳橋  
柳枝文章家の柳子厚書家の柳公權むつとして返れば門に  
青柳の又晴れて出る月の影歌澤の一口もの三十三問堂の  
柳の精靈現在に柳流しと遣た文句の中老尾上お堪忍強き  
處柳樽結納の壽と清元の外題柳の枝を持てゐる観音様柳  
に蛙柳の蹴鞠杞柳を巻げて栝椽を作り藝妓の巢窟柳橋妙  
見様の柳島福島柳圃柳の稻荷の下谷廣徳寺前の赤い鳥居  
でも黒い帽子でも皆何れもいなやかにしてギッ附かそ角  
立たず突き當らそ自由自在に随ひ時に移り誰にも彼に

も悪まれざる様に立ち廻るは妙の妙玄の玄手際の手際奥  
の奥ぐるりと廻て又奥の一間の中に入りけりと義太夫  
の段切りの様に姿形の引込んで仕舞のすして内閣に御出  
勤遊ばされてゐる事どの存じながらも廟謨深遠にして下  
々の耳に入らないので三條公の何事もかつしやらない様  
に思つてゐるが口が有るから丸で黙つて計りある者もなく眼  
鼻が有るから見たり嗅いたりするに相違なし折々の歌も  
詠み詩も作り文章も書き書も認め郵便も出しお笑ひもあ  
りお叱りもあり喜怒哀懼愛惡欲人間なれば自ら七情を具  
ひざるものなれば都ての事が人並みに往かざると云  
なきの借に保証する所なりと雖も相ひ願ひく嘉言善行  
今世の教へとなり後代の戒めとなり我大日本國千秋萬歳



幾億年の末迄も青史に垂れ新聞に載せ岩倉公の上在り  
 有栖川様の先きに立つ丈けの機能を一ツ宛も世に示して  
 女大學の代り養生訓の補ひ實語教今川の楷梯でなくてハ  
 イブル一切經の上に出で御規則の本元御布告の元素實に  
 明治政府の骨髓東洋獨立の神經たる證據を拜見致させた  
 ならば猶以て宜しかるべしと竹兄イが心附き役にも立た  
 ねいよまひ事ほごくなやい釋迦如來が元服して誤り謬文  
 書うと云てもいつかないか奇翻ぬと矢口の頓兵衛じやア  
 ねいから決して仰せらるゝ氣遣ひなし竹天子が祖父なる  
 月海の發句に月の雲少しほしいと欲の欲といふ如く斯く  
 聖君賢臣際會の目出度さを願みず此上にも教になり藥に  
 なり米になり金になりダイヤモンドになり珊瑚珠になる

程の言行を拜見聴聞の儀を四海の同胞三千五百餘萬も授  
 けたしと申侍るの實は恐縮の至りとの開卷の第一章も申  
 上たる通りなれ共兎角世間の人の口戸が立てられぬ時節  
 取り分けて國會請願の書數十通の多きも上り全國大半此  
 一點も肩を入れる次第もなり若人民より敢て請求も至り  
 其時又臨據なく開設を御許し之有る様な仕儀も於てハ國  
 體も關係を生ずるの恐れなきも非ずやと既も岩倉公の  
 御前もて請願惣代者が申上られたといふ位なれば何卒愛  
 國無二の初心を貫徹有らせられ天下泰平人民安堵の御發  
 言を偏も冀ふまなん

明治十二年十月廿五日出板御届

○一冊定價金五錢○十冊前金四十五錢○二十冊前金八



行 刊 時 定



十四錢

但遠國ハ此外ハ郵便稅申受不

東京神田區錦町壹丁目六番地

編輯兼事務主管 總生 寬

假局 同所 竹 天 堂

出版人 同所 飯 田 登 久



總生寬著述廣告

毎月十五日新作物一冊宛  
急度登允仕候何をも定價拾錢

○世海乗合船

一冊拾錢 當十月十五日發兌  
右の天子より下乞食薦被りよ至るま  
で各一身の心得一生涯の規則となるべ  
き新説を例の竹天子が妙筆を以て書き  
綴りたる一種無類の別品なり

○是非娛覽

一冊拾錢 本年八月十七日發兌  
右の現今の事み於て天下國  
家及びひ一身の上の是非得失毀  
譽又關係とる條々の裁判を  
したる珍奇の書あり

○命のせんたく

一冊拾錢 本年二月發兌  
右の人間樂みの最上たる事  
を綴りたる無類の新作物なり

○滑稽政談 上卷

一冊拾錢 本月十五日發兌  
右の明治の代今日の政事向  
きみ於て大目的とそべる方  
略古今無類前賢未發の新説  
あり

總生 滑稽演說會第四十四卷  
○土州の板垣先生出京の大説演 日本 市野山太郎

明治十三年九月下旬に至りて希有奇體列痴々等珍々云  
廟堂の風説が諸新聞上又顯りれ渡る其子細り有柳川様を  
太政大臣となし九條道孝郷を左大臣となし勝安房殿を右  
大臣となし副島一等侍講を參議兼外務卿となし河野文部  
卿を參議兼檢査院長となし津田議官を中將兼陸軍卿とな  
し板垣退助君を元老院議長又三條岩倉の兩大臣を内閣顧  
問又石井中警視を大警視又安藤則命君を中警視又澁澤榮  
一氏を太政官御用掛又又國會開設取調委員を内閣へ移さ  
るゝとあり夫又附きだか何だの知り難しと雖も岩倉右府  
と井上參議の兩君の引續き參内せられざるゝ附書記官局



より不参の御方の處へ使部の往復の實は數回の事なりと  
聞けり右内閣の一大變革の事を或る貴顯は問ひ参らせし  
又微笑せられて曰く何れ發令の有る迄は誰なりと新聞屋  
の勝手は役者を撰んで役割りをして置くに當り推量も些受  
條殿を左大臣三條岩倉公を内閣顧問とし議官より建白されし中  
取り難しと言われし由又其節或る議官より建白されし中  
伊地知君を内閣顧問と勝副島兩君を参議と復職云々の  
事ありしかと其他の事の事ハコ變なりとあり又中島議官  
の此頃辭職して民權の擴張と盡力さるゝ由且つ秋月種  
樹君も同官を辭せられたりと云さうかと思ふと集會條例  
の草稿を作り揚げられた大政官大書記官兼外務大書記官  
渡邊洪基君の此程議官は任ぜられたりと聞くと誰も是の

皆現在政府へ御勤め有る人々の轉任が多いのだから親父  
の畢九火鉢をお袋と貸し悴の印半天を次男と着せ女房の  
帯を娘と考めさせる様な物で格別の相違と云程でなし  
若し西郷隆盛が又陸軍大將となる江藤新平が司法卿兼参  
議となる大久保利通公が内務卿となる木戸公が顧問とな  
る會津桑名が伏見の先鋒をする脱走連が五稜廓へ立て籠  
る水戸の隠居の夷狄打ち攘ひの繪旨を頂戴する頼朝が姪  
が小島から旗揚げした足利尊氏が九州から押し出して來  
た朝鮮の退き口は日本勢が難戦した由井の正雪が玉川上  
永毒を流した八町礫の喜平次が舜天丸を抱へて鶴の口  
へ飛び込んだ大鹽平八郎が大坂の城へ大砲を打ち向けた  
と云様な飛び違ひ欠け離れの話じゃアないから誰が何の



お役みならうと食ひ掛けた焼芋を下へ置て聞く程の事  
ないの九月二十三日を以て東京へ着せられたる大先生  
前参議正四位板垣退助君の當分木挽町一丁目八幡屋を  
旅宿として府下の容子を見聞さるゝ例の國會請願者當  
時在京の面々毎日鴉も鳴かぬ内から出張して面會を乞  
ふ者恰も忠臣藏四段目の諸士等が判官の最期又欠け附け  
たるが如しと雖も板垣君の多忙も托じて容易又對面する  
事なく頻りに信濃路へ發足の事を急がるゝと云説の所板垣  
さんより又よく後藤さんの宅へ寄宿を移されたりとあり是  
此篇の大眼目なれども最う一ツの嘶しに従五位島津久封  
君が忠經と改名を願われたの左程の事より五位島津久封  
月廿九日より明治十四年二月十七日迄五日の間の鹿

兒島へ下りて父久光の看護致したき由を願ひ出られしと  
又其跡の大坂天王寺村の禪室に世塵を避けらるゝ得庵居  
士陸軍中將鳥尾小彌太君へ上京あるべしと其筋より達せ  
られたりとの風説何れも新聞紙上の取次ぎ話し迄にて諸  
社の受け賣りの見合せの積の處右板垣さんと同行された  
のり高知縣士族坂本南海男氏計りなるに九月廿九日を以  
て立志社の副社長伊東物部氏を始め同社員三十名計り出  
京されたりと云のつひならぬ板垣さんの掛り合ひが掛  
り合ひでないか確乎と分り兼ねると雖も十に八九十が十是  
は親玉が出て来る程だから其下働き先生が遊ば出て來  
たに相違なし今本家の大坂安土町或は日く對州の某だの  
と織に賣薬の下使すら現在東京又計り三百餘名の頭數が



宿屋飲を食以馴染女の文章を讀で滯留派出の時だから民  
權無類國會第一演說先達天下の形勢日和見の名人國事犯  
の名を受けす竹槍一揆の類又陥ちす痒くなく痛くなく只  
何となく程能く調子よく意氣に粹よと一りよ源氏物語よ  
十三經よ肉蒲團よ兎角判然たる形迹を顯ひさす只遠悉き  
よし松明の光りを見せ宇都宮公綱を追ひ拂たる楠正成  
の智零ほもかさく劣らぬ英雄傑の片岡我意でいな健  
吉さん始め辨舌溜々堅板よ氷を流すが如さり村井貞吉田  
邊南龍小金井蘆洲是の講釋師なりと雖も腕前の勝れたる  
の武藏坊辨慶加藤清正佐久間玄蕃荒木亦衛門よりも強勇  
無双の人物の數限り無き土州の連中なれば物大將すら出  
馬のいな出立ふ及だ此度の東京行きの事なれば夫も隨

ふ小猿でいな子分でもない御供でもない風呂敷でもな  
い同類でもない徒黨でもない生徒でもない門前の店借  
い重箱でもない新造禿でもない生徒でもない伊勢参りの如  
りでもない同志同心の惣社員のこくさいく伊勢参りの如  
く佐倉宗吾の門訴の如く朝鮮人通行の見物の如く兵隊の  
行軍の如く検査日の娼妓の如く一組が押し出し二の手ぶ  
操り込み三番が入り来り四番が飛び出せ五番が罷出で六  
番が顔を出し七番が八番九番が十番回向院の稽古角力助  
倍の床の敷腎を痛め精を耗し體を傷け身を殺すも恨をさ  
る若者共内神田の下宿屋は餘り馬喰町の旅籠屋よ満ち場  
末の安泊りよ溢色公園地よ夜を明かし人の軒下よ立ち通  
し材木の蔭檣の間屏の隅船の中橋の上土手の軒下居處も置



を帳の縛五八鹽の春上るき  
木一のり十厘石骨柳程處  
火を七附ま厘炭拔ののの  
土を大錢附つる天ののの  
金極二をのて保九天のの  
永二を乾の置十十ののの  
六を坤三をののののの  
でもねい七面倒八附野郎糞を食へ十方  
ねい七面倒八附野郎糞を食へ十方  
七面倒八附野郎糞を食へ十方  
八附野郎糞を食へ十方  
附野郎糞を食へ十方  
野郎糞を食へ十方  
郎糞を食へ十方  
糞を食へ十方  
を食へ十方  
食へ十方  
へ十方  
十方

を以て屢人附ける百不具の圖一切合材の物が陽氣よある  
して足を戴く蝟肴とい由良の助が洒落耳を以睡へ附け眼  
搦ち額を以て皿を受け南人の見世物も宜しく手を  
ぬ夜打ち朝掛け先陣争ひ逸を以て勞を待ち實を以て虚を  
の穴幡屋誰となく彼となく景氣の附き騒ぎが立ち言  
方内務卿柳川蝶齋大橋順藏三遊亭圓朝藤田傳三郎根津  
助白木屋の駒絹川の谷藏無官の未夫犬久保彦左衛門松  
草の生人形田浦の牛殺し摺鉢山の情死守田勘彌木村庄之  
太鼓米屋町の仲買女主の後見箱屋の藤さん半玉の赤襟淺  
の跡押し女郎屋の文使ひ獅子舞の笛吹き手妻のかんか  
油蠟燭紅白粉荒物小間物義太夫常盤津新聞の配達人力車  
もねい錢廻り金の融通市中一般の遊び所戯れ家業の勿論



から何はしろ大勢人の集るのの結構ありと雖も殺伐  
あ事をそる先生方あんぞの有難さ次第も非れば成る丈け  
小人數でしつほりと京の四季とか葉とか極まじめよ  
洒落て頂戴えたし此時は當て沖の暗いのよ白旗が見える  
の白刃が光るのと云ひ決して感心仕らず只何事も縁ど時  
節の末を待ち無病息災家内安全女房大切權妻大事臺所の  
儉約火の用心按摩上下二百文夜更て犬の聲さへあい様よ  
天下静謐五穀成就目出度くの若松様やと踊たりとねたり  
大道中ではへやらあけりやア屯からやかましく云氣遣ひ  
のふし先づ御若い衆は隠便の儀を御勤め申入れ置て今  
下の人心の民権といひ國會といふ一點も止て下戸の前は  
壯丹餅を出し土戸の口へ池田伊丹を瀝ぎ入れるとも味を

えらす著を取らざる程熱心の最中に至りていさも有るべ  
き事もがらさうあい以前からソラ大坂へ来たヤレ鯨獵よ  
出た社を立てた演説を始めた何をしたら彼をしたと評判を  
なし浮説を唱ひ舉動を伺ひ進退を見て居たのハ人望だの  
徳望だの其由で来る所を辨へずと雖も知るも知らぬも押  
しなべて言ひ隠したる前参議板垣退助さんの御身の企彌  
此度の東京へ出張た又附ての妄論風聞の沙汰の限り建白  
をしして大政大臣よなる積りだの攝政關白を懇望するのだ  
の銀行を立る見込みだの無盡を企る爲め魚鳥會社へ仲間  
せる了簡だの米屋町へ手を出そ爲めだの魚鳥會社へ仲間  
入をする氣だの善光寺へ参詣は行く目論見だの今金の隣  
へ鰻屋を出して賣り出そ算段だの三韓征伐をそる軍勢を



集める為めだの東印度の島廻りを始るの札を正金よ引き  
換る為めだの釣り銭に困らない様に方立てを附るの西郷  
の追善供養をそる為めだの藝者の權妻を見附けに來たの  
だの新新聞屋と議論に來たのだの刑法治罪法を研究の爲め  
法律學舎へ入學を爲めだの藤田一件の引き合ひだの國  
會請願惣代理人の墨量をとめしに來たの新富座の借金  
未を附に來たの様子を賣て附け文を別品からされるのを  
待て居るのだの靖國神社の角力を見に來たの富士の山が  
ら比摩拉山へ一勝にする氣だの堀の内御會式に來た  
のだの惠比須講をする爲めだの出雲へ神様の御立ち跡の  
留主番を勤める氣だの麴町の井戸へ身を投げ積りだの  
夫り千差万別鷄も豚も洋犬も石の地藏も金の燈籠も今の

戸人形も取りくワイくの噂たら何と何を理どし何を是と  
何を尤とし何を至極なり何を然るべし何を允當なり何を  
着實なり何を確乎なりふ拔なり基礎なり柱石なり梁木な  
り太黒柱なりと見定める事能らず聞き留める事能らず  
語同斷落花微塵混淆錯雜交互紛亂本氣の如く狂氣の如く  
大根の如く蒲鮮の如く瓢箪の如く疝氣の罌丸の如く油氣  
の抜けない咄水氣の取れぬ説澁皮の附てある論苦味辛味  
の深い筋否み氣たつぶり氣障氣離れぬ雷同説人の尻馬道  
路の野次馬牛後の奴隸鶏口の青書生我悴の積揮も無くし  
て天下國家の御若勞世界各國の比例を見ても國會又顔を  
出し口を添へる人物の何れも何圓の税金を收めるとか何  
程の地租を出すと云者よ非れば決して心配すべさ事よ



非らず是皆人の風摸様を見て何かせしめんとする火事場の  
泥棒大漁の鱒盗み同様の了簡から起るカボチャ共此の  
如き族の砂村へ引き込み葛西二合半領へ退いて糞桶の蓋  
を叩き権兵衛が種蒔きの手傳ひをする方が功のなく共社  
會の害を與へざるべし竹天子の如きに至りては政府の目  
附役でもなく下使でもなく事觸れでもなく御用新聞でも  
なく立身を望む者でもなく願て溜めへ下る者でもなく區  
會の議員もなりたい志願もなく板垣氏の同派でもなく親  
類でもなく大鼓叩きでもなく獅子まひでもなく笛吹きで  
もなく況や同論でも附屬でも支配下でもなく固り民權と  
云事も知らむ國會の趣意も弁へず只自分の飯を食て自分  
の願を叩き自分の手で筆を握り自分の了簡で無着茶説を

書くのだから上も下も横も堅も筋違も日本橋  
よも浅草行きも新橋も千代軒も瘦馬も元げた馬  
車も乗り合の人込みも物後架の掃除も一向掛り合  
ひ遠慮憚り聚がり引ばり義理順着の無い一本立ちの野中  
松峯の白雲俄の夕立ツツの火蛇の眼玉蟻の腸程も差  
響きの無いツツ人問も似た蛆蟲なれば勝手次第  
の見込みを以て夫の板垣さん出京の一件を論ずるも何  
も不思議のない足が有るから歩行く眼が有るから見る耳  
が有るから聞く口が有るから食ふ板垣さんでも同じ人間  
だから四國又計りの引込んで居られないから東京見物も  
出て来て又用が有るから信州なり越後なり佐渡なりどこ  
なり見て歩くので有るべし跡から附て来たもの飯へ



蠅がたかる金持へ欲張り附て廻ると同じ事で只がヤクど  
豊年踊の跡から子供が大勢で附て行く例の無中連尻馬組  
が分別もなく譯もなく胡麻摺り半分乗り氣半分下手銭を遣  
て浮れ出した事なるべしと下宮のウイく連の相場を附け  
て板垣さんのごうだとも云と維新の功臣もやえ違ひねいが  
只の功臣ならん舊参議今の参議何れも昔維新の功臣格別  
功臣が勿体ない御利益が有る御光がさす神佛同様だと云  
極りもなし板垣さんが廟堂に居る時別は是と云眼立た  
事をしたも聞かず行たも見届けず只常体の参議さん征韓  
論も附て辭職されたのが抑名の知られ始め其征韓論の西  
郷氏が第一番で其他の人の御同論で見留印を押して次ぎ  
へ廻心た迄の事は是も珍らしいと云譯でりなく其御仲間

いくらも有る事なり西郷の戦争も附ての賊へ味方でもな  
く官軍へ忠勤でもなく見込みを附けて勝敗を言た事もな  
く日本人同士の切り合ひを困たものだと歎息の説も聞か  
す況や仲裁をして早く泰平よそる策もなく只ぼんやりと  
日を送てゐた處の少しもかいらぬ只の人腕は大力の有る  
事も聞かず弁舌のよい事も承らす文章を作る事も存じ及  
ばず詩も歌も俳諧も川柳都々一も葉唄も茶の湯も活花も  
藤八拳も是が名人だ達者だと云一藝一能の有る事も聞か  
す元と参議をしたと云廉を以て頼まれもえねい野次的が  
取り巻く迄の事で女惚れのした説も知らず施しをした例  
も聞かず新聞へ投書をした事もなく只土佐も板垣先生其  
人があるのみ演説會も斯う云名論を演べたと云事もなく別



よ取るべき事の無き人物と思へるなり去る午ら人が必  
ず歌がよめる詩を作る色が出来る金を貸し議論を立る建  
白をむる魚鳥會社を開く軍をむる裁判不服を云刑法治罪  
法の注解を作る國會請願の爲め腹を切る温泉へ權妻を  
連れで出掛ける能狂言をして貴人を招き奉らないでなら  
ない云譯しやアない眼で見鼻で嗅ぎ口で噛み足で踏み  
手で握り造物主から授けた精神と父母から賜られた肉體  
とを以て我身一生一代人の世話とならず厄介を掛けず生  
を養ひ死を送り無事安樂よ世を渡りさへれば人一人の  
役目よ於て毫髪も欠くる事有るべからず人の世話をまな  
けりやならず政府の口入れをまなけりやならず演說會を  
是非まなけりやア人間でないと云譯しやアないから只の

人だといつて夫が悪くい語らないと云筋に非すと雖も夫  
板垣さんヤレ退助さんと大神宮様より先きへ貴く思ふに  
の思ふ丈けの人に勝れた言行才能を見認た上でなけりや  
ア何もそんなにガヤク云よ及ぼす國會も請願も物代も  
歎願も自分の自分丈けよ見込みを附け分別を定め自主自  
由の事をするならば夫こそ男子の罫丸の有る證據今命の  
ない事をすると千歳の後迄も芳名を蘇がす事をま様と  
勝手次第夫が悪いと云譯にはあらず實に見るに忍びざる  
事が有るか聞に耐えざる譯が有るかして身を抛ち命を的  
よし身代を棒に振るとも他人より決して一言も批判をす  
るに及ぶべからずされども何の分別もなく何の道理もな  
く一夕の空論暴言を信じ大勢の力を頼みよして上を誓り



長を嘲り黨を結び力を用ひ世間騒がしの徒事の誠も早眞  
平御免頂戴も預りたし今我國の人氣よ於るや能く其質を  
見届けず聞き遂げず川路さんとり大久保さんのごう岩  
倉さんのは三條さんの何伊藤さんい夫れ大隈大木さん  
是々とは人の訴判世の浮説を證にとてやたら無性よ折紙を  
附け是で之世が治まらないう夫でも人民が堪られない是で  
の財政が困難是でい條約が六ツかしのと其人よ達た事  
もなく話た事もなく寫眞屋の看板で見た位を當てよして  
あの人の免職するがよい此人の太政大臣だの其方の元老  
院の議長だの大統領ぶのと無法無暗にござなり散らし騒ぎ  
廻るの何の了簡だか譯の分らないの親玉喻ひ其人よ達て  
一言二言嘲をしたら處が夫で其人の活券が極るものでな

し相場の分る筈でもなし一旦敗軍の大將孟明も終よ能く  
大功を樹てたり始め董卓の害を除いたる曹操も果の漢の  
逆賊たり人の心中の外面から見た位で急度した事を云譯  
よ參るべから一ッか二ッ新聞上で宜い噂を聞けば日本  
一の豪傑の山田さんだ海内無雙の卓識高蹈の鳥尾さんだ  
と宜い評判をそのの誤ても其人の瑕よならねいから宜  
お間が悪いと飛んだ引き出し違ひで一生涯の不爲めよな  
る浮名を立てられる人もあり誠も早今の人氣の早掛り早  
合点目方もなく品格もなく段々軽薄お趨く世間の有様人  
の口當てにならず其人の行ひ當てにならず只徳を取りた  
い電信にかぢり附きたい甘い仕事に有り附きふいの外來  
年の事も今年暮も借に世の爲め國の爲め思ひを焦し心

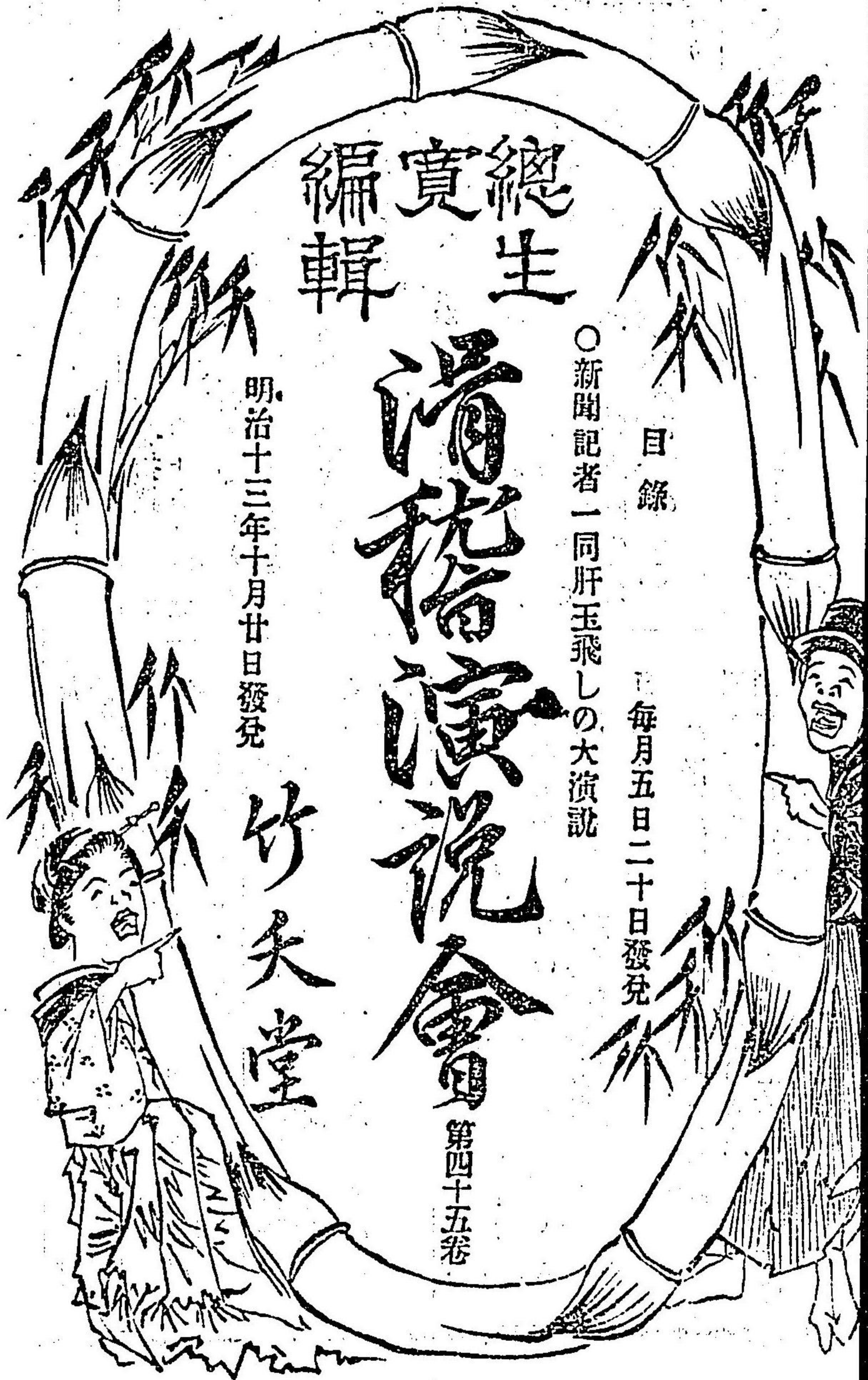


を盡し言ひ分のない御代よまたいと云心ひそつち除けの  
 族の數限りなし黙雷だ介石だ青巒だと言へば大學者  
 だ名僧だ知識だと思ひ其人の論理を聞た事もなく學術を  
 試した事もなく只遙拜敬服して名利好きだか山師だか道  
 樂寺の流派だかしらすして新聞紙上の名前を證み取り福  
 地と云へ聞け任經濟の名人と思ひ柳北と云へ知れば詩文  
 章の玄妙を極めたもの得心得其人の實行よごんな功能あ  
 るが疵の有るがごんな名吟があるか名作があるかそこ  
 へ並べて他人の品と比べた譯でもなく編輯長と社長と  
 さへ見れば字内の上等世界の物識りも存する輩のみみて  
 其人よ直接の討論をする氣もなく引き札を信じて賣藥を  
 飲かか如く媒人口を當てよして嫁聲を取るが如く錢を溜

めるのを見て才子となし發明とそるの比り利欲世界よ於  
 ての無理なりざる事なれ共清潔白二點の曇り一毫の私  
 無さ心より見れば誠み以て氣の毒の至が笑止の限りど雖  
 も是も時世の然らむかむる處今上下賢愚一般の目的とむる  
 文明開化の四字何れも是れ外觀虚飾實着み乏き文字なる  
 を以て見れば輕薄淺季の有様にいふ及ばざる事なごら  
 内外共よペンキ塗り表裏同じく洋紅染めの姿をして日々  
 よ進歩せしむるの心有る者浩歎堪ゆる事能いざるなり  
 明治十二年十月廿五日出板御届  
 ○一册定價金五錢○十册前金四十五錢○二十册前金八  
 十四錢但遠國の此外よ郵便税申受候  
 是迄賣捌所の中勘定金滞り候向の差送不申候間本社へ  
 直段よ御注文奉願候



行刊時定



○取分けて廣告仕候の滑稽演說會の儲毎月兩度發兌の處  
 毎月十五日一回宛新作物を發兌し付其都合より演說會  
 を一回發兌仕る事も有之候得共決して怠りの筋あり之無  
 く候故豫め申上置奉り候

相州横須賀

大塚 靜 喜

横濱太田町二丁目卅五番地

伊勢屋梅藏

新規賣捌所

出板人

飯田 登 久

同 所

飯 局

竹 天 堂

同 所

編輯兼事務主管

總 生 寬

東京神田區錦町壹丁目六番地



總生寬著述廣告

○變妙百物語 一冊拾錢 來十月十五日發兌

右の現今よ在て見難く聞難く知り難く言ひ難き人々の身の上事の理由を鑿り穿ち一々奥の奥を堀め新の新を盡したる變妙不思議の書なり

○世海乗合船 一冊拾錢 本月十五日發兌

右の上天子より下乞食薦被り至るまで一身の規則となし一生の心得とて世を渡るべき道理に於て造物主直傳の真意を承けて説き著したる奇中の奇書なり

○是非娛樂 一冊拾錢 本年八月十七日發兌

右の現今の事よ於て天下國家及び一身

毎月十五日新作物一冊宛 急度發兌仕候何きも定價拾錢

上の是非得失毀譽又關係とる條々の裁判をしたる珍奇の書なり

○命のせんたく 一冊拾錢 本年二月發兌

右の人間樂みの最上たる事を綴りたる無類の新作なり

○滑稽政談上卷 一冊拾錢 本月十五日發兌

右の明治の代今日の政事向きよ於て大目的ととべる方略古今無類前賢未發の新説あり

○滑稽演說會既發兌の分目錄

- 四十一號 岩倉公國會問答の大演說
- 四十二號 有栖川左大臣皇居造營論大演說
- 四十三號 三條太政大臣評判の大演說
- 四十四號 土州の板垣先生出京の大演說

總生 滑稽演說會第四十五卷 寬著

○新聞記者一同肝玉飛しの大演說 甲斐 田宿修理

是の此度世よ珍らしきと賣り出す其本店の新聞屋連中が揃ひも揃て大過誤の禁獄の珠數繋ぎ罪金の御用散財呼出しの第何時代人相ならずとの嚴命の承知畏りても畏らな

いでも畏たど謹て請書よ調印せざるを得ず恭く仰渡され

の趣きを領諾せざるを得ず扱此箇條のと御目を留められ

ての迎も免れぬ天の網を頭の上からすつぽりと目出度被

たの極々輕少なのが讀賣新聞記者が三十五圓第一大苦

難泣きの涙の先生が贈記者禁獄三年罪金八百圓其外廣問

新報近事評論扶桑新誌の類或の禁獄二年罪金三百圓或の

禁止或の停止新聞屋の條例よ在りと所在廉々の厄介悉皆



取り集めて残る所なく天頭敷又合して御ふり掛け又相成  
りたるのたりと雖も皆何れも澤山賣と覺もあり名の聞え  
た功もある舊來の株式なれば難澁の中も亦何と加して  
難澁の凌ぎ様もあるのも知れされども爰又取り分け迷惑  
でもあるべしと思ふの政談社なり是の一月又四度とか  
五度とか出す都合で大新聞の様に書ふ一枚ものを綴か八  
九回出すか出さない内に一年半に百五十圓を頂戴のお灸  
の痛み入るに相違なからうと餘計な心配共看板の中立黨  
と名乗てゐても矢張り夫らしいかして現在の證據の斯の  
如しと云ふのも未だ新聞社會に於ての其日數の立たぬ若  
い者迄にもいかぬ赤ん坊井戸へ這入るも知らずして先へ  
先きへと計りぬたくり出すの出来の後來に至りて石

白を引ばつて歩行たと聞く夫の福島市松が幼育ちの時  
如く追々名を揚げ功を積み七本槍の一人三振り太刀の何  
某三杯目よのそつと出す居候出せば出る氣で五六杯なく  
り込む糞肚胸七夜も立ぬい内から定齋屋をさめ込む若夫  
婦八艘飛びの九郎判官十勇士尼子の柱石山中鹿之助河中  
島の山本勘助竹中半兵衛人中の巾着切り火の中の消し口  
敷中の鷲原中の一本松野中の清水何もかも引くるめ又大  
株よなる下地かも知れぬいが先づ早速の所の貸け惜みを  
除けたらば實又恐れ入り誠又當惑殊更又肝玉を吹き飛ば  
さいるを得ざる事な事として又一ツの御愁傷御心配御氣  
詰り又思し召すならんと存するの信濃毎日新報社は是なり  
其記者を東京より傭ひ入れ其資本を有志者より出し集め



其論説を物數奇の理屈家より買ひ込み其雜報をおまやべ  
りの口より拾ひ込み未だ二三箇月立つや立たざる間も内  
務省より停止の御沙汰之有るとて一錢端書の裏へ活字を  
植て其次第逐一相認めハイ郵便と投げ込んだり其停止  
の日數も於るや大体四五週間を以て寛大の御所置海容の  
御恩もより又々始めの如く御免しを頂戴する例の有り  
と雖も中々下々の心を以て上々の思召の計り知り得る事  
難き故一年にして解くるや十年百年にして相濟むや千年  
万年にして御構なしと仰せ出さるやや慥に相分る日迄は  
記者筆を置て歎息社主頭をひねりて會計方と共々算盤王  
を詠めざるを得ず實は御察し申しても申さないので滑稽  
社會の我々敢て差構ふべき事もなく只都より一を吹ひ合惚

を踊り女の子は可愛がられさへすれば夫を此世の樂みと  
し此身の手柄功名として三度の飯を三度つゝ賞ひ食ひも  
しないで膳に向ひ箸を取り菜漬を挟み大根をかぢり百事  
の成ても成ないでも學者氣取りを捨て通人社會も顔を出  
し夫婦喧嘩を内職とし火の用心を大切とし借金取りも留  
主を遣ひ甘い者も面を出してヘイコンチの態を罷越し  
邪魔よされながら長尻をなし手拭を被て居る箒を横目よ  
見て聊氣は留めす心頭は掛けす又煙管を出しお先き煙草  
を吹かし紙を貰て後架は行き壁に向て樂書をなし千早振  
る卯月八日をすらくと讀み下しハ心得ぬ此張り交ぜの地  
紙の歌の先年山城の宇治よて秋月の娘深雪も某が書て與  
ひしと云様な思ひくをして罌丸隠しと手を掛け大便を成



し崩しとして外から来る人を咳き拂ひで追ひ返さずと  
して一問へ立出で我民間より育ち人々顔を見知らぬを幸  
ひ居候となりて入り込みし此家の娘の身も若し聲なき  
のあらんかと餘所なら守護する甚助夫と覺て靡かぬや  
ハア合點の行かぬと播磨屋が勝頼の身振り假聲を遣て綾  
瀬川の温泉のおかみさんと思ひ附かれるか葎町の奴さん  
と浮名を流す算段でもして居れば事の足りるのみと思し  
召す者之有るべきの信濃新報の印刷人小柳屋喜太郎さん  
の竹天堂出板の品々賣り捌きの大見世もして誠な大切の  
附き合ひ柄既よ右の新報發兌の第一號も於て出鱈目の祝  
詞一篇を綴りて掲載を受けたり其翌日の同樂者の田印が  
投書其後も頼まれさへすれば何時でも顔を出す中なる故

諸共よ悔え入り何といつても他國の事竹天子の臺所よ  
影響の及ぼざる元々が四角四面の流義違ひ新徴組天誅黨  
水戸の天狗派も宜くと云コツく一方木曾山の木枕風共よ  
赤繩の繋がない大新聞口調よしして義理一通りの關係な  
りと旨て置ける事ハ置ける様なもの大風も蔭なし大津  
浪よ塵芥を残さす西南の大亂の西郷桐野のよ止まらず  
多くの彌次馬傍杖を受け米相場場の停止の獨り仲間計り  
の青い息さよ非ず其近邊の待合船宿料理店食ひ物懶け者  
の入り込む所の一体の歎息よ及ぶと同じ譯よして竹天子  
の生れ出でたる新聞社會の本籍と皆さん御存じの團々社  
の第一の發起人の元奏任社會の一よ在し先生よして西洋  
万里を航海したる苦勞人之が爲めよ内外の周旋彼を聘し



此を徴し誰を招き某を呼び入れたる百方の使節の實功を  
樹てたるの河野節造なり此人元醫家なれ共天性活達伶俐  
よして官途の楷梯へ足を掛け退て表向き編輯長の任を負  
ひたるの開業以來の事未だ團珍社を開かざる時又竹天子を  
尋ね來り滑稽の相談及びれたる心地直様出頭すれば舊知の醫家  
痛めて返り車又逢ひたる心地直様出頭すれば舊知の醫家  
向島の老手渡邊雄伯父よりも竹天子を用ひたれば何  
と申送るの鉢合せの蕭何の取り持ちも子房の割符よ於  
ぬ如しとやら跡よて聞知りたり此折同時又顔を合せたる  
の梅亭老人瓜生氏畫工よの本多錦吉郎子あり印刷の竹天子  
室誠一氏あり先本文の組立よ於てのお先走り印刷の竹天子  
大略を立て曰く茶説雜報雜録投書と其間よ判じ書を挿む

事よ決せり表紙の畫の衆議よ成り團珍聞の名も衆評よ  
歸し末の日録も亦相同し是よ於て茶説第一よ掲げ出した  
る團の説の河野氏と竹天子の手よ成り雜報の衆人の  
手よ成り判じ畫も同斷雜録の詩文章共よ四角文新淨瑠璃  
共よ竹天子擔當せり都は川柳狂歌の如き竹天子と瓜  
生氏と相兼ねたり然を共惣仕上けは至りての紅白粉を附  
けお客様よお目通り終り竹天子よあり此時投書家  
の無き事ゆき寒し晨星とて皆社員の腕力の茶説の河  
野氏稿を起む者もありと覺えたり出版五六號目お至りて  
寫字生横田房吉なるもの河野の任名を受け継ぎ且田島象  
三氏を引き摺り込めて一週間よ一日宛の手傳を頼ま是れ  
ら給の趣工を受け持ちたり都合ありて編輯長の名を押し



附るに至りても勤むる處の手傳ふ來りたる日の如く物體  
の取捨統轄の權の竹天子は在り因て他人の夫の長技  
ありて一事一端よしまれ共竹天子の誓女子守りお乳母  
さんより緋の袴よ至る迄掛け持ち兼帶の事なれば是が長  
技と云事もなく此が毒立てと云事もなく人見知りせざ  
る事赤子の乳房猫の天蓼狐の油揚よ於るか如也然れ共  
田舎邊土の人より只其編といひ輯を云字を見れば眞又其  
人其任は在るものと思ひ玉ふも多かるべきが内幕は都  
合と云もの有て給金の高は實を顯わし名前目其時の宜  
きは隨ふものとす其後の岩崎好正氏會計方より出て編  
輯印刷社主賣捌屋了堂の主賣藥取次西洋酒シヤボンの類  
迄引きくるめて受け持ちとなり其外南橋翁を頼み入色て

詩文類の助力高垣の逍遙子を加えて茶説類の彌次馬竹天  
子の受け持家督人らしくせしむ極々近來ふかし立ての薩  
摩芋も宜しくと云次第團珍附録に至りて我が樂多問答田  
島象二人情話花曆梅亭翁の作の外一切竹天子の手も成れ  
り此間よ於て或の茶説或の判じ畫其外何事はよらず趣向  
の種を出して諸社員もふり掛け意外の妙趣工業案外の新發  
明を出その社主兼社長此社發起の苦勞人先生は止まれり  
此人の所謂將又將する者竹天子等の兵は將たるものなり  
英和對譯の文の英人某を傭ひ且尾崎某氏は任したり斯く  
無い智慧を振ひ勤め難き場所を通り越して今日に至り竹  
天子の勝手勤めの隠居株田島は全く別派を開き河野の官  
途よ紛れ込横田の米相場よ手を出し彼此屋の中よ放て



一杯戯言といふ花柳境の事を綴り自ら其書迄を書きたる  
の又感心と言ひざるを得ず器用なり調法なりと稱せざる  
を得ず其れ他誰となく彼となく這入り込て色々な所作事を  
なす筆奴ありと雖も是等の皆朝顔を出して夕に退き土  
曜の半どんは来りて明る日の日曜は飛び出すが如く鶯鴉  
泥棒猫同様の陳笠連よして取て齒牙を掛るは足らざるな  
り夫から今日の今は至る迄千變万化を貸して表屋を取  
られ居候を置いて女房を乗り取られ如き景況ありと雖も  
是古來例ある高鳥死して良弓藏れ狡兎死して走狗煎らる  
なご否よ陰氣な長物語をむる譯の此度の同業社會の大  
變亂我國珍社も他社の四角文句同様よ既に一遍停止を蒙  
りたるさへ恐縮罷在る處よ本月某の日を以て編輯長名前

大岩崎好正自身罷出べき旨東京裁判所檢事局より御差紙  
頂戴したれ共同人儀の當年十六歳なれ共五六十以前よ  
り自惚れと瘡氣の病よて社用と自家の夜職の滞り無く勤  
めなからも打臥し之有る故醫者の容休書と委任状とを携  
へて竹天子代理を引き受け罷出たる處其翌日の竹天子を  
直談よ罷出べき旨御達よ付其日の代理での無く團珍社用  
よで罷出たるに書工の本多錦吉郎氏も同日御呼出又社員  
瓜生氏と渡邊氏出頭未夫々御尋ねの筋を答へ荒々口書  
を致し調印をして引き下りたれ共其儘よ今日よ至る迄何  
共御沙汰の無さひ定めて平日滑稽洒落を以て江湖の御機  
嫌を取り結び笑を催ふさせ愁を拂ひせ壽命長久の良薬と  
なるべき趣工を勉強怠り無さよ因て御賞與の御沙汰銀盃



頂戴と遙まの行かず共木盃か今戸焼か土器位夫も叶はず  
の規貝猫の椀位の品の拜領相成る事と内々當て込み罷有  
れ共外れるの當て事と越中横禪萬の萬一萬々一オヤくさ  
うですか本當よさうなら濟まないよと云様な事なご天よ  
り降るか地より涌き出すが如き事あらば世間并々の事と  
論當人よ於て迷惑よ及ぶ者なごあらば世間并々の事と  
申ながら先々下さらふい方が千萬有難く存じ奉るからと  
いつて情實を歎訴する譯よもいかす賄賂を遣う譯よも舊  
幕時代と違うから相ならずされば逆皆色男だから金いな  
し力の無し日々洒落を言ふも口が落ち着がす都々一を  
吟じるも思ふ様よ語路が廻らず女に逢ても勇氣が衰へ  
物を食ても喉へ通らず戦々競々として罰金を思ふが如く

禁獄を案じるが如く何おして免るゝ事を知る哉笑止と會  
子が末期よ門弟子を呼んで言し如く堅酢を飲んで扣へる  
ると云のも覺えよ餅の錢猪を食よ報いとにいふ者の可愛  
やな君の御爲め兼てより覺悟の極めて居あがらぬせめて  
人らしの者の手よ掛ても死ぬ事よ素性賤い銀兵衛が女房  
づれの劔よ掛りふぶり殺しを現在よ傍よ見て居る母が氣  
のこの様よ有らごう有ら思ひ廻せば此程から唄ふよ歌よ  
千松がよの先代萩の政岡が口説きたが君の御爲めよ云譯  
でもなく書た者の書た者の爲め是を罰する者の銀兵衛よ  
妻所が大政府の御役人様よがら手よ御掛なざるも御尤の  
事掛らざるも當然の筋で差留められやうが叱らさやうが  
ぶたを様よ一言半句の不平を鳴とべき道理なし去り乍ら



憐むべき新聞屋の職分書く愛し書かね記者の數な  
らひ捨つべき物の筆もぞありけると言て見よばざりか新  
聞記者の慷慨だか悲憤だか愛國だか外國だか氣も掛けて  
居るかと思はるが中よく以て當てなすの親玉と思ふ  
次此廣い世界一人もあるまいが有た日やア化けの  
皮がむけて新聞記者を信仰せず信仰しない時やア其新  
聞が賣れず其新聞が買れない時やア其社が立たず其社  
が立たない時の其社員が給金を取れず給金が取れなけり  
やア飯の食へず飯が食へなけりやア腹がへりや  
ア詰り死て仕舞う死で仕まへば寺へ遣られる寺へ遣らる  
れば埋られる埋られば骨計りもある骨計りもあるれば肉  
もなし肉が無けりやア肝心の女の子も逢う樂みがないか

ら何でも世間の人の氣に合う様にするに人並々の事じやア珍  
ら世間の人の氣に合う様にするに人並々の事じやア珍  
らしくなれし珍らしくなけりや面白くなし面白くなけりや  
ア買入がなと買手が無けりやア此前の順なる人の氣も  
合て賣れる算段の人の思ひ附がねい事を探り出し人の言  
ひ兼る事を言ひねいじやア外は好かれる工夫なし人の思  
ひ附がぬ事人の言ひ兼る事を書けば則ち法律も觸れて此  
度の如くと内よも其後福岡日々新聞が禁止を蒙りたりと  
聞く所を以て見れば書くと書かざるとの間を渡らされば  
満足まで通し譯は相成らずとも言ひれず迫の日々新聞の  
日報社報知横濱毎日等の怪我がないが今日無いからと言  
ても明白か明年明後年千百年の後迄筆先さが迂らないと



の受け合ひ難し去れば逆法律杯の上み出る道徳學宗教論  
理義學等を以て著述をなし引導を渡し善根を勤める程の  
力のなし只一通りの流行本を讀た青書生上りて英吉利士  
の鉄砲のこんな音がするとか佛蘭西の掘り尻のあんな句  
ひだとか獨逸人の馬の乗り様の斯うだとか梅毒の検査の  
こつちの足を斯うやつてそつちの股をさうしてのと外か  
ら見える道具立て細工事の上から計り眼を附けて眞の道  
といふ者も筋と云物も辨へない人物だから是非此札の此  
位有ての斯うだとか此條約が是々での西洋人が種紙をこ  
うしたとか石炭酸をどうしたとかルトオサクをどうし  
たとか云迄の事で外よ云ふべき事がなくさればと言て陰  
よ勸善懲惡を込めて歌をよみ詩を作り文章を書き自然の

化育を贊くる様な程の宜い智慧や能いなし何でも演説だ  
民権だ四國だ岡山だ何だかだと騒ぎ立てるを除く時の世  
ま立て何の功能もない只の人間元より直打のないのよ直  
打ちを附け様と思ふ所から見留めも附がぬ事も造らし  
く言ひ聞かぢう事も現在手から手を握た様な事を言て  
民権者の番附を拵へたるを見れば勸進元の後藤象次郎氏  
両大關が板垣鳥尾氏行司が片岡謙吉氏其外大名もあり一  
番生もあり店向きの番頭もあり大工の弟子もあり女郎屋  
の若衆もあり寺の穴堀りもあり等外の免職もあり巡查の  
古物もあり色々様々の天道千の賣り物同様なれ共今我國  
の民権家よ於るや官員の時ハググともエツとも言ハねい  
で何か一ツ仲間同士が派口の合ハねい事が在ると突き出



されるのだから辭職だか去らぬいふ官途を退くや否士百姓  
 や素町人の山師連と一所になりて政府と反對の説を擔ぎ  
 廻そののいよむや尤も聞える事が有らども元以燒摺子木の  
 腹立紛れの半身せ六七分通りハ狂亂の下地とも知らそ知ら  
 者も亦夫を飛ぶ思ひ附きの積りで其尻馬み附きヤリ物  
 代だ夫頭取たと飛び歩行き新聞やみさへなれぬい族が騒  
 さ立る事が多いのよ閉口新聞屋まさへなれぬいといへば  
 新聞屋も賤い様み聞えるが元官員でゐた所が免の字を食  
 て再勤の傳信がなし商法をとるみやア元手がなし郵便配  
 達をとるみやア足が弱心學校の教師みなつた位じやア妻  
 子も養へそ權も置かれぬ猫も揚げられず據なむ商人と  
 士族の間のごまかし家業黒塗りの車も乗る者もわり馬車

を拵へる者もあり習生羽織を着る者もありステッキを引  
 張て歩行く者もありア其の鎖を光らせる者もあり眼薬  
 を賣り出す者もあり酒屋になる者もあり御巡幸の後から  
 矢立を腰へさし草鞋を穿て駈け廻る者あり色氣話を聞  
 として人の軒下に立ち廻り洋犬に食ひ附かれる者あり其  
 内証の狂言の油畫も書き難く顯微鏡も見分け難し去  
 れば記者の肺肝の政府の非を言ふと限た事でも無く民権  
 む肩を持つると定譯でも無く只澤山賣れて自分々々の取  
 り前が殖えて贅澤を十分もとる様みさへなれば夫で何  
 も議論も節義も愛國も忠孝も有ら事でないながら内  
 の兎まれ角まれ條々も職を事を書けば其法律も照らし  
 て何の罪とか何の科とかみ處せらるるい處する者も處せ



らるゝ者も皆其筋合鼻の下の爲めで是非無き次第一社の  
 編輯名前を以て自分の書た事計りでもない位なら宜い何  
 と有るか彼と有るか無我夢中の無筆文盲者が荷も長と云  
 名の爲めは社員一体の重荷を一人で脊負込んで獄窓の中  
 へ嘯き廣い世界を狭く樂む合乗り車なら宜が獄卒の手  
 掛り罪人と同居をして百年の壽命を縮むの誠は氣の毒  
 なる事なれ共其代りより平日何の業も無く暮りなく三度  
 の飯はヤレ乳母だのコレ千松のと云へき御難を免かれ人  
 並らしく何程かの月給を取る代價ふれば承知の前覺悟の  
 上娼妓の瘡をかき軍人の打死手負商人の損毛航海の難風  
 聲機敷居て役者のいふ事が分らないと同事夫の夫丈の  
 事よして可愛さうぶがと雖も不憫ありと雖も爾禁獄彌罰

金と云場合に至りては何んともすべからず其厄難の日  
 に出逢ひざるの其人の運の宜いの出逢たのの其役目相應  
 の務よして誠は是非あき次第なれば先づ禁獄中の氣を長  
 くして満期放免の時節を待つより外有るべからすとの道  
 理の上利屈の廉なりと雖も同業相隣むどの昔おりの地口  
 行燈は有る文句なれば一日も早く青天白日を見る様は致  
 したしと蔭ながら祈り上げ参らせ候と云女の子の扣て居  
 る者も有るべしと幾重も御察し申候と聊相違之無く候

明治十二年十月廿五日出板御届

一冊定價金五錢〇十冊前金四十五錢〇二十冊前金八  
 十四錢 但遠國の此外は郵便税申受候又郵便爲替にて  
 代價御送りの節は内神田郵便局當て願上候





總生 寬編輯

# 滑稽演説會

第四十六卷

目錄

每月五日二十日發兌

○娼妓買ひ秘傳の大演説

明治十三年十一月五日發兌

竹天堂

前金相切れ候共御斷無之  
内引續差上申候猶又郵  
便局無之地別持込税  
申受候

東京神田區錦町壹丁目六番地  
編輯兼事務主管 總生 寬  
同所 飯田登久  
同所 竹天堂

### 新規賣捌所

相州横須賀 信州長野

大塚 静喜 小柳屋 喜太郎

上州高崎 高知縣佐川木町

井上公通 上村龜次

### 別段の廣告

滑稽演説會并み毎月十五日發兌の新作物共御蔭を以澤山賣捌り相成  
千萬難有奉存候因て右御禮の爲め且つ竹天堂より別段郵便取り遣  
り御馴染の爲め詩歌川柳ご一文文章何れも寄らば御投寄下され候ハ  
高案妙作の分へ評語と批點とを加えて演説會と月々の新作物へ附録  
仕べく候間續々御投寄之程偏み奉願候但し新聞原稿開き封まして無  
税よて御送り下されたく候

總生 寬 再拜



總生寬著述廣告

○變妙百物語 一册拾錢 本年十一月十五日發兌

右の現今は在て見難く聞難く知り難く言ひ難き人々の身の上の理由を鑿り穿ち一々興の興を妨め新の新を盡したる變妙不思議の書なり

○世海乗合船 一册拾錢 本年十月十五日發兌

右の上天子より下乞食薦被りに至るまで一身の規則となし一生の心得とて世を渡るべき道理に於て造物主直傳の異意を承けて説き著したる奇中の奇書なり

○是非娛覽 一册拾錢 本年八月十五日發兌

右の現今の事は於て天下國家及び一身上の是非得失毀譽は關係する餘々の裁

毎月十五日新作物一册宛 急度發兌仕候何きも定價拾錢

判をしたる珍奇の書あり

○命のせんたく 一册拾錢 本年二月十五日發兌

右の人間樂みの最上たる事を綴りたる無類の新作なり

○滑稽政談上卷 一册拾錢 本年九月十五日發兌

右の明治の代今日の政事向きは於て大目的とすべき方略古今無類前賢未發の新説あり

○安本丹樂經 定價三錢五厘 本年十一月五日發兌

右は明治世界の事に於て言ひ難き處を言ひ盡したる現今穴搜しの新作にして之を讀めば直よカ、ボコとやり出せる經文なり

總生 滑稽演說會第四十六卷

出雲 茂照太郎

○娼妓買ひ秘傳の大演說  
古今集誤解の序は曰く病氣ある女郎乘り人の鼻を取るを常として萬の瘡氣とぞなれるさればや氷に住む鷺山は啼く蛙いつれか色氣を含まざらん色は思案の外にして利口者も之を禁する事能はず馬鹿も之を好まざるを得ざる次第の世の中の樂み芝居を見花を詠め月を賞し雪を愛し油書を翫び寫眞を掛け酒を飲つて歌を唄ひ踊り利屈を言ひ涙を流し笑を催ふし餅を食て氣を重くし腹を膨らげし口吻へ餘をくつ附けるなご何れも其人其品其事より千差萬別西郷隆盛は厚徳の樂み様あり千金丹の賣り子は安土町の得意あり大久保彦左衛門の趣魚鳥會社頭取の



様子長命丸の功能國會請願の旨意團子坂の菊細工新富座  
の幕明今紫の手管系平の法螺團々珍聞の停止曙の八百圓  
三條様の給金も宜敷八箇月の流れ質十三年のお袋の追善  
蘇武が十九年の夷狄住居二十の大島田二十五が男の厄年  
二十八字の七言絶句三十一文字の天智天皇四十餘年未顯  
眞實と釋迦が法華經を説くの由來蓮伯玉五十よして五十  
化す細川頼之が入生五十功無さを愧づ五十よして天命を  
知る四十五よして開ゆる無さの五十以て易を學ばな  
ご論語のせりふの扱置き六十よして文久四つ七十よして  
心の欲する所よ随て人生古來稀天保錢よ十文不足孔子の  
弟子の數八十の老子の母の胎内よ下宿をして居た年數釋  
迦の入寂九十九夜の深草の少將が品川の土藏相摸へ通た

日數千年萬年待た迎何のナリチン。た。よ。り。が。ア。ア。ア。  
ア、ア、ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。  
皆夫よく分よ應し物よ隨て樂の相違があるが色氣と食ひ氣  
よ至りての旦那も喜悅僕も喜悅奥様も甘けをば下  
女よも甘く上の口と下の口へ入る物よ至りての其味の  
同じき事の今更云迄も無き事なり去ればこそ食色の性な  
りと告子の伯父さんが井生村よ於て演説の論題よ掲けら  
れたり又大學よの好色を好むが如く悪臭を惡むが如くと  
人の心の實情を説かれたり此色氣よ於るや獨り助平連計  
りよ好む所よ非ず天地交感して萬物化成し諾冊の二柱交  
合して三千五百萬の天頭數よ及び素戔嗚尊稻田姫を權妻  
でない眞の妻君よすると云其眞姑と約束をして八頭の



大蛇を退治し、其他伏羲神農黃帝堯舜文武周公孔子の之を以て之を孟軻も傳ひ軻が死して其傳を得ずとの仁義の道を決して其傳を得ざる氣遣ひなし鳥でも魚でも蟲でも獸でも草木でも經節でも蒲鋒でも豆腐でも油揚でも皆夫の相手を見附けて田夫もなるどか口取りの中へ顔を出すとか田樂はなるとか葱南蠻の中へ雜るとか相手を拵へて用ひ立るの交合をして其働迄をなすと相替る事なきも似たりされば身の丈三尺も足らぬ猿面冠者の大將でも淀さん横懸慕が元で會津百萬石を取り揚げて子息忠三郎殿を宇都宮十七萬石の國替高減らし網杓子も宜敷赤飯の鬼も親

類附き合ひ跛で目かちで三ツ口で脇鼻で元ちよるで手足が水蟲で頑癩で大食ひで毒立てなしで泥棒根生り。さうだかしらないが人間一切の疵どする事に於て釐毛も小馬以下十八桁の末程も抜目のない佐野治郎左衛門も八橋太夫と思ひを掛け強情無類長刀一本七ツ道具の外所有物之無しと云武藏坊辨州も宿屋の娘と契りを結んで落し子を孕ませヤア愚か今日の日戦ひ敵と目ざばり安徳天皇夫も隨ふ平家の一門敦盛の扱置き誰彼とまのぎを削るも用捨ならうかと眞赤な顔を振り廻して軍の物語をする熊谷の直實でも藤の方の處も待奉公をして居る時相摸と通じ合ひ思ひ直して親里へ連れ来て夫婦が身を忍びと手と手を取り落ちち行く先さの九洲相良道中筋の三州の吉田通れば二階か



ら招くまかも鹿の子の振り袖で大きな腹を隠してもとう  
く小治郎直家と云子迄なしたる信田妻の狐ながらも保名  
の所へ嫁入りをして浮名を流し鬼と呼ばれた柴田勝家も鬼  
將官と評判を取た加藤清正も西郷隆盛も平親王將門も皆  
子の有る所を見れぬ此道の御免頂戴と引き下た譯でもな  
し況や只の人々よ於てをや三千人の宮女五百人の姫妾十  
二の后三人の因州稻葉先さなる娘も中なのも跡なのも各  
夫々よ趣きあり功能あり取り分けて近來妻君の古る物を  
國元よ取り遣し權の字の仮靴を造て借老同穴の約をなほ  
の流行の四十以上棺桶へ片足を入れ石塔へ半腰を掛た白  
髪天頭皺苦茶の硝燈親父殊更此風を好み此舊弊の元  
天頭の既よ文化文政度より腐敗世界草臥社會よ生長した

る故口の先さや筆の掻き廻し様での尤らしくも見せ慷慨  
の句ひも附け愛國の假聲も遣ひ競争進取の体裁も作るが  
先入主となる腰抜け育ち臆病質へ丁簡ヒヨロ根生  
兎角跡へ計り引き込んで實事を勉強する氣が無いから筭  
術も知らば窮理も心得ず人民の權利も吞ま込ます人間の  
義務も心掛けば廉恥節義も氣を留めず只程能く泳ぎ廻り  
てたんと錢を取り正直者樸柎な族を欺し附て割の宜い方  
へくと計りペテリ込むを常よとて居るから自ら身体が隙  
氣よ心配が少いから小人間居して不善をなす富めば奢る  
奢れば淫すところくな考えぬとない筈此輩の如きの實よ天  
下の黷潰し國家の鼠有て役よ立す無い方が富國強兵を  
以て本となし人智を開き人才を溶治する時節よ當てり實



む厄介と謂ひざるを得ざる老込みの強者とい言へ志士仁  
 人世を思ひ時を憂ふる慨然悲憤の餘り己が意よ合はざる  
 浮世を見るのが否さよ馬鹿となりたけとなり狂氣とな  
 りて放心する為め酒を飲て伴狂を遣う者あり飲中八仙  
 の如き是なり又竹林の七賢の類も同儕由良の助の祇園町  
 よ於る赤垣源藏の飲み抜けよ於るが如き皆實から出で  
 たる虚なり源五兵衛の小萬よ於る重衡の千壽よ於るお如  
 さの虚から出ざる實なり抑心ある者の酒よ酔ひ色よ溺る  
 い其表向きの處り謝安が東山よ妓を携へて遊びしも米  
 屋町の相場師が霞町の藝者と福井町の温泉へ泊り込だの  
 も似てゐる様なるもの、實より出る虚虚より出る實何れも  
 も皆實といふ取り得が有るが今の助平親父がする所の外

よ何の分別もなく氣概もなく朽たる木葉士の膺手の附け  
 様のないよ、い、連中よして虚から出た虚空から出た空屁  
 の如く人魂の如く痴人の夢の如く一厘半開けの直打ちも  
 なきへコ附き一派外よ人間らし、了簡の雑り氣なしの無  
 しよ、去て置て誰でも彼でも堅よかぶりを振るよ違ひない  
 色氣の道なりと雖も男女七歳よして席を同らせすだの夫  
 婦別あり人の大倫の男女より始ると至て重んじてある  
 故よ親よも見せない此品をよ云位だから麥湯の婦さん矢  
 場待合のお傳馬娘おばすれ女と雖も今逢て今ウ、と云か  
 言ひないか、慥よ受合ひ兼ねる様な次第で兎角手数が掛り隙  
 の潰れ夫よ為め何を買て往くとか何を見に出るとか餘計  
 な手續手順夫筋の便りを求めるよ附て夫相應の散財もあ



りありでも宜い様なもの、急度其末は大願成就多年の宿志全く叶ひ日頃の存念滞りなく通るやら通らないやらそこ所がそこ所なる故に奴さん腕を組み手を摺り胸を痛めて四苦八苦途方又呉れて親分又相談するよりも伯父さん又歎願するよりも差配人又届けるよりも三大臣へ直訴をそるよりも太政官へ請の字と出掛るよりも小西甚さんも宜敷と辨し附るよりも根津の下等貳拾錢より貳拾五錢上等又於て四拾錢吉原が貳拾五錢より七拾五錢或は壹圓若又翌日又至り行燈部屋又立て籠り懇意近附へ電信を掛け詰り屯所の御厄介又なりて示談又致せと仰渡しを受る積りなれば一文あしでも命を取られる氣遣ひなし懲役はなる心配もなし女郎を刺し殺して自分も死ぬの相方を連

れ出して居所露顯の上元の貸坐敷へ引き渡ししよなるのと云事其當人の好み次第只の客がしなげやア顔が立さねい幅が利かねいと極譯でないから先づ色氣が有て錢のないもの有り合せ丈けの懐で人力車をねざり込る吉原迄と言つちやア直段が高い上先へ着てから増を呉れるの何のと云餘計筋の有るら田町の孔雀長屋迄の土手下どの大音寺前どの六郷屋敷の新開地象瀧町迄の鉄漿溝迄どの太郎稻荷の社内迄どの袖摺りの横町どの山谷橋迄どか淺草田圃の溜跡迄どか其近所の名を言て車引きさよ油氣を見せず堅氣の用達し通來の者と沽券を定めさせ衣紋坂から下りて五十軒へ這入るも京一揚屋町の横手から押し入るとも京二伏見町の裏口から進撃すると



御茶屋よとね橋を掛けさせるとも小口の手續の各勝手次第吉原の地へ足を入るや否小格子の前よ立つ根津品川板橋新宿千住小塚原神奈川程ヶ谷戸塚平塚大磯小田原伊豆箱根兩所權現船玉十二社大明神縁起棚を飾り松茸を祭り御客大神宮毎晩々々廻しの取り放題割り床の這入り次第明日の検査と留められる迄も玉高の澤山出来るのを祈り奉り願ひ上げる場所柄家業向さの何れも同じ紋切り形でお世辭笑ひはそつと袖の先きを押しな御道化よお浮れ遊氣味の悪い親方がエへい様御道化よお浮れ遊ばしてよいおいらんを御見立遊ばしてサ附けました鳥渡り何れも御縁繋ぎの爲めけして御無理な事申上げません

サお早くござらへうお遊び様で御座いませう何れござらへうかお馴染が御座いませうが箇様な處へもお断しの種兎も角もこちら迄御廻り遊ばしてと離の方へ押し込まれるオオよしてくんねい。おらアいけねいんだ放しなつたら赦しなせいでさつこく。またつてもいけねいよ是さ何をそるんだと力を出して振り拂ふ者もあり額から稲光りを飛ばして巻舌を用ひる者もあるが明た口へ牡丹餅上りたのり上りたのりさか十二時前から泊り込みも言ひ兼るし壹枚壹本を觸れ込での小物丈けが怪しく徳利の代りなんぞと來る日やア一世一代會計上の心痛明る朝ななりて代物を形と預けて置くから後迄貸してくれと言ふ處の杉戸屋の蝙蝠傘で知れた事夫で宜いと云ふ氣



遣ひのなし附き馬の近來まかれるのを。けんのがつて人  
 力車も乗せて送り込まれる金策先さ只の車引きじやアね  
 い使ひ屋兼帯の事だから五六銭の處迄の賃銭が三四十銭  
 或の五六十銭までくすると三銭の不足も追ひ銭をして壹  
 圓内外の算用も及ぶの例の當今の通り相場女も何か取て  
 くれと言ひ入れて否だと云ふのの色氣がなし考へて居れば  
 サアさうおしなさいよと身体をゆすぶり乍ら催促される  
 聲の振りをすりやア通用が悪るしもてる頼みもなし啞の  
 振りをすれば手真似で勧め込まれる馬鹿の振りをすれば  
 断りなしと取り計らわれる利口な振りをした處が立番中  
 どん二階のおぼさん相手の女が一同も口を揃ひて彼是言  
 入れた日やア多勢も無勢長い物も巻かれる諭の通りご

うしても仕方ない中を格別の損もせず野暮とも見せず  
 ごうせ意氣だ通人といいかすとも程能く切り抜ける策の  
 先づ是々で此位と云胸算用をしてすつと其品を誂ひ置き  
 晝間の飲み過ぎでケ。イヤハヤ留飲氣で何だか必持ちが  
 重いからとか足が頭痛するからとか罪丸へ癪がさし込む  
 からとか脊中の三里の灸がさうしたとか尻邊たへ精鑄水  
 を附るのらとかそこの宜い加減なまかして込んで横は寝  
 轉び類杖を突きながら少しも飲むからア床をいれ  
 てくんねい誂ひが来たらそこへ置てくんなせいと直なた  
 手水も入ふつしやめと言ひれねい内も兎も角も障子の外  
 へ出て座敷を片附る都合をよくさせるのが大目的で  
 をひよごらせるとひよごらせないとい其時の臨機應變床



の土へぬたくり揚る屏風が立て廻る煙草盆が枕元へ来る  
灰吹きをそつと叩く様は叩かない様はホタをはたく鉄瓶  
の湯を一掴貰てそこらへはねかさない様は口をすゞぎ灰  
吹きの中へ溢れ出さない様は注意して吐き賣丹を紙入れ  
より出して少く含み口中の臭氣をふり替かない爲め是  
も内証の嗜みごとたばたしない様は夜具へむぐりて厨をか  
へない様は鼻かす提灯を出さない様は屏風を蹴倒さない  
様は先き煙草を吹かさない様は人の手を使ひない様は  
用有りさうは見へない様は待つ居さうでない様は心を倒  
かして身体をゆつくり見せ腹ん這ひよふない様は仰の  
けよなふない様は眞横よなふない様は宜い加減は枕を附  
き夜具を天頭かす被ふない様は足を出さない様は犢揮を

廣げて置かない様は袋をはうり出して置かない様は紙入れ  
を幾度も明けけない様は女を聞きかさない様は女房持ちの振りを忘な  
嘶を忘ない様は毎晩中へ来る振りを忘ない様は是の損だ夫の徳だと會  
い様は毎晩中へ来る振りを言ひない様は餘所でたんと遊だ振りを忘  
計筋よ拘ひる事を言ひない様は餘所でたんと遊だ振りを忘  
ない様は馴染の有る振りを忘ない様は食物の甘い味いをお  
んまり言ひない様は外の女郎の顔の佳悪を言ひない様は兎角  
事馴れない様です事言ふ事は半間な事がなくて能く其  
氣を取り其圖よとまる様は肝要なるべしと計りでの分り  
兼るお方が有るかど案じ過しの餘り猶又細注を附けて申  
す時の毎晩中へ来る者の氣の利て居るの其仲間の者同様  
で珍しからず粹を通し思ひやりをして女の氣嫌を取れば



取る程此か容ハ黒人だから金の無心も言ひたせず別段な  
世話よなりたいといふも間が悪るし斯うなたら内幕の  
鹿も見られるだらうと反て氣味を悪るがり寄らす障らす馬  
の害われぼなり食ひ物の甘い疎いを云時の元より臺屋  
の品よして甘い物決して有る事無し只食ひたくなぐども  
其場の目先の賑かな爲め客の方でも取り女の方でも  
取らせるのが常だから入れ物器物計りを大きくまゝり廣  
げたり計りして皿の手廣き事當てまならず枝豆大根の類  
で席を取らせる米筆の深きの安心し難し揚げ底の計策有  
ればなり白鳥徳利の大なる事喜ぶ足らず遙底の方よ當  
てコボくの音なればなり然れ共廓の内よ住む者の三度く

よ金子の料理を食ひ土手下掘杯へ注文して遣る譯よ往  
の無いから其臺屋の代物を食ふより外はなく下等の酒を  
飲まざるを得ざる故よ臺屋の物計りで日を送て居るのを  
甘い疎いのと云と常よ其品を食で居る者よ極りを悪く  
させ恥をかゝせる様な物なれば其邊の思ひやりなればな  
り故よさるが爲めよ就中餘計な世話ながら通人社會が  
若し居續けなごとして是非臺屋の品を食ひなけりやアなら  
ぬ時よの寄せ鍋鳥鍋かばか鍋蛤鍋の類か生玉子乃至香羹  
の極種の宜いのを取て食ふより外よ仕方なし只一夜の事  
で歸りよの平松當りか甲子隅屋なごで腹を拵へて往く事  
の出来ない時の馬道の藤屋奴鰻田町の蛤五十軒の播磨屋  
中よて荒治濱田等の代物で濟ませ置て臺屋の物への箸



を附けざるゝ如くいなし然色共藝者買ひの是と反對よし  
て我一人の貯の天歎羅詩麥で腹を塞ぎ鯛井で十二時を間  
よ合せ今金の二階で焼け附た鍋へ茶をさして酸るとも勝  
手次第なりと雖も口を掛けて遣る時よの成丈上等の會席  
よして其料理の甘い辛い座敷の佳悪庭木敷石の摸樣及び  
一切丁寧と疎略の差別を辨へ柳橋の新橋葎町の何日本  
橋鳥森での誰くど年頃恰好藝の巧拙様子の直打ち衣裳の  
好み應來の遅速米欄の豊疲箱屋の性質よ至る迄委敷心得  
て居るを以て幅の利く譯もあり杯の他事よさらぬだよ紙  
敷の少さ處を思ひ本題の旨よ立ち返りて云時の遊び事の  
場所へ立ち入るよの質よ質よ置き借金よ借金の形よして  
も宜い着物を引掛け身形を綺麗よするを第一とす色共中

等以下のチヨンく等へぬさくり込むよの成る丈錢のなさ  
さらな風体を是とし彼是散財の勤められ筋を立て切るを  
肝要なりとするの最う言ひ出されよの否だといふの既  
よツツと見られよのを腕力で免かれんとするが故よ其  
望よよ任せざれば吝と思ひれ言ひれた通りよすれば見込  
通りよ食ひ附かれるかよ大体外面の体裁で餘計な事の言  
ひ出されない様よするを戦ひずして人の兵を屈する善の  
善なる者よして所謂孫武の秘訣なり去り乍ら夫の傍の者  
への見せ掛けおごかしの手段よて我相方よの成る丈け見  
悪くない風體をするを外虚内實の妙計となす此方法よ於  
るや齋を脱で羽織を顯の上着の木綿物を取り拂て下着  
の等外よあふざる所を示し揚る時の帯の無地を見せ歸る



折よの博多織の變り縞を見せるが如きを上手の所作とな  
 そ小見世で利屈を言ふ様な事をせず散財の少さを功  
 名と大見世で馬鹿氣過ぎきい様遣ひ方の多さを立  
 派なりとは是草鞋の丈夫なるを好し冠の美しく飾り有  
 を貴ふと相同じ是より媚妓の精神は分け入り骨髓はいく  
 り込で百發百中我内暗みならずして廓津ま明るくなり其  
 筋の人情は行き渡り用錢少爲快多と云古今無類の新説は  
 取り掛る小口は於て一冊の御名残と相成りたる故第四十  
 七號は於て傳ひ難き所を傳ひ明し兼る譯を打ち明し一刻  
 千金の費をして一冊五錢は替え實は竹天子が御し並々木  
 地の儘は御覽に入を奉るは何卒本月廿日例の發を御  
 待ちの上此道の極意を御窮め之有る上の第一澤山の馬鹿

錢を遣のざるのみならず娼妓の方から端書が降り込で買  
 入れ様な事及ぶから身上を延す種となり其次は染  
 耀歡樂此上も無き場合に至る故壽命の樂となり其上は又  
 老後に至り若い者杯の夢中遊びを規むるは能く其情實を  
 知るが故野暮又惡堅き事を言のざるは因て其詞をして尤  
 む聞かせる實功を得る事受合ひの妙理なれば必ず御自分  
 様は此次の發を御失念の勿論御親類一同御懇意近附  
 衆御一體へ此段を態々御示し置の程願上參らせ候

明治十二年十月廿五日出板御届

○一冊定價金五錢 ○十冊前金四十五錢 ○廿冊前金八十四錢  
 但遠國の此外は郵便税中受候又郵便爲替にて代價御送りの節は内神田郵  
 便局當ては御振り出し願上候 ○前金相切れば候共御斷無之内は引續差上申  
 候猶又郵便局無之地は持込税別は一錢中受候





總生 寬 編輯

滑稽演說會

第四十七卷

○權妻秘事の大演說

目錄

毎月五日二十日發兌

明治十三年十一月廿日發兌

竹天堂

○滑稽演說會合本

自一號 至十三號

一同

自十四號 至廿六號

右何れも一冊定價六十五錢外  
郵便税一冊に付六錢ニ御座候

東京神田區錦町壹丁目六番地

編輯兼 事務主管

總生 寬

飯田 局 同所

竹天堂

出版人 同所

飯田 登久

新規賣捌所

相州 横須賀 信州 長野

大塚 靜喜 小樽屋 喜太郎

上州 高崎 高知縣 佐川 本町

井上 公通 上村 龜次

○別段の廣告

滑稽演說會并々毎月十五日發兌の新作物共御蔭を以澤山賣捌り相成  
千萬難有奉存候因て右御禮の爲め且つ竹天堂より別段郵便取り遣  
り御馴染の爲め詩歌川柳ご一文草何れも寄らと御投寄下され候ハ  
高案妙作の分へ評語と批點とを加えて演說會と月々の新作物へ附録  
仕べく候間續々御投寄之程偏々奉願候但し新聞原稿開き封よしして無  
税よて御送り下されたく候

總生 寬 再拜



○よん處ふし 一冊拾錢  
十二月十五日發兌  
此書の種々新作物の中よ於ても亦別段よ  
思ひ寄らざる事のよん處なる事を述べた  
る奇説なり

○變妙百物語 一冊拾錢 本年  
十一月十五日發兌  
右の現今よ在て見難く聞難く知り難く  
言ひ難き人々の身の上手の理由を鑿り  
穿ち一々奥の奥を窮め新の新を盡した  
る變妙不思議の書なり

○世海乗合船 一冊拾錢 本年  
十月十五日發兌  
右の上天子より下乞食瀉被りよ至るま  
で一身の規則となし一生の心得よえて  
世を渡るべき道理に於て造物主直傳の  
眞意を承けて説き善したる奇中の奇書

○是非娛覽 一冊拾錢 本年  
八月十五日發兌  
右の現今の事よ於て天下國家及ひ一身  
上の是非得失毀譽よ關係する條々の裁  
判をしたる珍奇の書なり

○滑稽政談上卷 一冊拾錢 本年  
九月十五日發兌  
右の明治の代今日の政事向きよ於て大  
目的とぞべる方略古今無類前賢未發の  
新説あり

○安本丹樂經 定價三錢五厘 本年  
十一月五日發兌  
右は明治世界の事に於て言ひ難き處を  
言ひ盡したる現今穴搜しの新作よして  
之を讀めば直よカ、ゴトとやり出せる  
經文なり

総生 滑稽演說會第四十七卷  
○權妻秘事の大演說  
夫一婦の外又別よ一婦を娶る之を權妻といふ或の曰く  
聘すれば則ち妻奔れん則ち妾といごうか嫁よ貰ひ請けた  
い女房よしたいと媒人を頼んで先方へ申入れてから出來  
るのが本間のお佳味さん女の方から男の方へ人を頼んで  
言ひ込み文よして口説く眼つきで知らせるたつた一日で  
も宜いからか側よみたいお飯炊きでも宜いからあの人の  
内へ住み込みたい無理よ持ち掛るのをおメカさんといふ  
事なれ共今時流行の權妻の夫との同じ様な事で違う子細  
の別儀よ非ず設令女房が有うが無らうが給金を取て其役  
を勤めるのを權妻と云又男の方から申入れ様が泣き附り



が涎を垂らし掛け櫛が慾徳づく一通りでメツコをするの  
を權妻と云抑權妻の始りの聖人の名を取た舜が娥皇と云  
堯の長女を女房と賞ひ受けながら又其妹の女英を娶たの  
が古い所の引き合ひ咄し夫から紂の姐已幽王の褒似より  
夏姫驪姫等春秋戰國の頃も勿論漢魏六朝何れの世も追  
々流行我朝も於て有名なるが後醍醐帝の龜菊義朝の讓  
り物が常盤義經の靜今の島津家の頼朝の妾服より出たり  
と云高師直の五十人を持たとある信長秀吉徳川始祖凡そ  
英雄豪傑と言ひける者皆權妻あり其外只の人でも其事  
計りの英雄豪傑同様も有る者も亦澤山徳川の末も至りて  
大御所と唱へる家齊公の百餘人の權妻有りて五十餘人の  
子を持つたとあり元の太祖の五百人の妾を置たと聞くの大

體情慾の親玉かと思ふさ唐の玄宗の三千人尾上多美藏の  
千人の肌を汚さんと願しと云辨慶のたつと一度で思ひ切  
たど云小浪も力綱との三々九度閨の契りの一夜切りと九  
段目の末も見え二世を結ぶの枕さへかんと間もなく此様  
な悲しい別れよなる事何の因果ぞ情ないとい初菊が重  
次郎へのさなり文句の太閤記十段目の大落しの前も載せ  
語らふ間さへ夏の夜の短い契りの本意ない別れとい誰も  
口癖よりなる朝顔の物語毎晩逢ふたら嬉しがる實どうす  
りや添はれる縁じややらじれつたいよと云惚れて通ふの  
三下り又相の手へ附る文句計りじやアねい逢ふても逢ふ  
ても未だ逢ひたらぬ添はざ止ひまい此苦勞と云古い都々  
一もあり適ふ逢う者毎晩もまたし毎晩で飽きが来る



から替た物をほしくなる替り物も相摸の國の住人でお  
んまり下さらないから娼妓藝者矢場水茶屋待合茶屋など  
の口へ世間がうるさしどいつて断念する譯も往かず表  
向きの子種を取るさか召仕も置くとか手足をさすらせる  
とか七十八十の行役婦人を以てすと云禮記の規則だから  
左右へめんかの代りも置くの着物の洗濯飯の給仕部屋の  
掃除花見の相乗り芝居の同道縁日のひやかしよ出掛る位  
迄の所を書掛けよ計りで一冊の丁數有り丈けとなりたる  
故據なく仕舞よえた故よ未だ筆の先ぐくすぐつたくて痒  
い所へ届かないよりも残り惜さひ本月十五日を以兼て評  
判仕り置きましした變妙百物語の第二章目なる權妻物語よ  
於て世間無類古今よ例なき權妻道の奥を窮め新を穿ちて

申上是迄竹天子御鼠負の御客様へ御思報心御禮の爲め是  
の既よ聞及んだよりの案外の趣向思ひ寄り候事故權妻の篇  
と御賞美の御詞を頂戴仕るのを樂よ仕り候事故權妻の篇  
よ於ての別段よ腕を入れ書き綴り出したるよ未だ其興味  
を盡さずして目出度しこの場所となりたるの實よ残り惜  
く存心奉りたるよ附き此四十七號を以變妙百物語の不足  
を補ひんと思ひ立ち候故本題を掲げ出しましたから十分  
よ權妻の趣きを書きますが變妙百物語を讀て後此篇の御  
さを知り得べく此篇を見て後よ變妙の手際の手際あるを  
た別ちよ相成次第よ候間此篇を御讀み遊ばさるよ御方の  
必ず變妙を御覽下し置く様御客様の御爲めと手前勝手  
とを取り交せて申上奉り升一體作者の腹案の娼妓買ひ秘



傳の大演説の續きを此度申上べく心得の處只今の次第よ  
て權妻の物語も相成候事故娼妓買ひ秘傳の續きの此次ぎ  
來十二月五日發兌の四十八號に於て委しきが上へ尙々委  
敷面白きが上へ又々面白く仕候間何分も次號を御覽下  
されたくも又もや例の廣告體の事も押し移り大事の大事  
の紙敷を減らし候段の恐れ入り候得共是も商法上は於て  
據なき所と申し附けても來月十五日出版の新作物壹冊拾  
錢の代價に定りの頂戴品一名(よん處なし)と云稀有奇體列  
の篇を著述仕候間是の又別段は竹天子の新中の新趣向案  
中の別案彌當年中の新作物の御名殘も附き皆々様定て御  
家業上の御用向並女の子と御文通の事件等色々御忙繁  
の御中どの御推察申上候得共何卒奥様方又の權妻衆御馴

染の藝者かいらん達と御笑ひ漸しの間も御覽下し置れて  
浩然の氣を養ふの御種も遊ばされ候様と是も餘計な御願  
筋も候故大體も申上置き權妻の筋も分け入て其道の骨組  
み肉持ち肺肝の具合に萬事萬端揃た女もして權も出る者  
あり又田舎者の驅け出しもあり素人もあり藝妓娼妓の揚  
りもあり長唄常磐津其外踊浄瑠璃の師匠もあり四十以上  
のお婆さん株もあり十四五歳の肩揚の取れぬ娘の子もあ  
り士族の子もあり町人百姓の子もあり別品もなり不別品  
もありおまやべりもありムツッもあり親兄弟のある者  
もあり獨り身の者もあり贅澤なもあり節儉なもあり  
大食ひなのもあり小食もあり借り着もあり貸す程衣物を  
持てゐる者もあり白粉の濃いのもあり薄化粧もあり素顔



の好なのもあり麝香の香ひをさせるもあり腋臭もあり鳩  
 胸もわり柳尻もわり鱗足もわり跛もわり聾もわり正直な  
 のもわり泥棒根生のあるのもあり頬ぺたの赤いのもあり  
 縮れ毛もわり何れも同じ人間なれば世間も有る品々の無  
 いと云事なし發句の出来るもあり詩を作るもあり歌を詠  
 ひもあり竹天子が知る人某なる者の權妻故有りて其家を  
 去る時よ千代迄も契りし脊子が紀念とて只一言の筆の跡  
 と詠みしを聞けり又千金丹の賣り聲をなす者あり豊年の  
 眞似をする者あり早起あり寝坊あり晝寝を好むあり居  
 睡りをぞるあり齒軋りをするありすかし屁をするあり役  
 者の寫眞を貯て置く者あり義士銘々傳を讀む者あり二一  
 天作を必得て居る者あり文久三ッの勘定を知らぬ者あり

其種類の色々様々なりと雖も何者の子に拘へらず器量の  
 宜いのを旦那の方から見込まれて是非權妻にまたい思召  
 の有り難いがアレハ聲取りだから左様な譯もなりませ  
 ん彼れ嫁も遣る積りですから御世話もなる云次第の  
 致し兼ますと辭退するのを縁附きの口が有るなら其時の  
 いつ何時でも都合のよい様にするがよし此方又扱て決し  
 て差擧う譯でないから先づ其迄の所ごうぞとしが云事を  
 聞て呉れさうすれば外々縁組みの時一通りの着物も  
 持へて遣る軍筒も買てやる妹分もしてやる親類附き合ひ  
 ますする何の株を買て遣る家を作て遣る地面を買てやる  
 質兩替をさせる親元へ仕送り立派にする兄弟を引き取  
 て世話をする仕度金が入るから望み次第何でも彼でも己



の言ふ事をウと言てくれと無理無體拜む様よし我物  
よするのを除くの外の皆内々で懇意の者を頼み其口を搜  
して貰ひ世間への堅氣の振りで客を取るの夫筋の始り  
ごうせ一度他人の手又掛るもの一人の旦那を取るの  
天下の定法何れも構た事いねいと云處の理屈のある様  
も一月立ちて其旦那を取り換る壹年又して別の口へ乗り込  
む三日目又其人をペケとして外の方へ賣り附る段又至り込  
で亦兩夫又見えざる掟との反對して娼妓が客を取ると  
相替らさいのを承知でするの承知なみのか今時の親  
々々餘り困らなるでも娘の子を遊ばして置みて詰らな  
いと當り前の仕事でもさせる様よ尻を賣り出す一週で  
も子の出來る時の出來ないと言ねないのや何かよの

向順着せず若しボテと来た時よア一服廿五錢で水にす  
る薬もあり婆さんに譯を言やア御法度の裏もある手前療  
治なら芥子を食ふ蛭を飲む何をすれば苦勞よアならね  
い是をすれば造作もねいと腐豆の殻を打つちやるよりモ  
手易い事にしてゐる下等社會の貧的に於ては落花微塵會  
利骨敗利屈も道理もあらばこそ食ひなけりやア何でもす  
る泥棒さへしなけりやア屯所からやかましく言のれる譯  
りねいお向ふの子を御覽十三の暮から旦那取りをして兩  
親を樂に過すお隣のちやんのあんなお國もんの  
かぢいさんを能く取り持て居るから着る物もわの通り天  
頭のものも下駄履物も立派にしてゐるおとつさんの和ら  
いどてらを着てお花をしたり講釋場へ計り這入てゐる朝



から燭を附けて寝酒を飲で好きな事を言ひして置く娘もあ  
 るのにお前なんぞの詫の有る人いやだの異人さん嫌  
 ひどの琉球の好かないのと勝手な事を言ちやア旦那を  
 くじる折角掛た無心を取りはぐる約束した物を貰ひ損  
 う年過年中親に樂をさした事いねい娘の子を育てるの  
 何の爲めだと思ふ當り前は家業をえたり肩入天秤を當て  
 たりする氣なら人間を止める方が氣が利て居る藪の上か  
 らでも貰ひ手いにくらも有るひのそ人遣て仕舞か三ツ  
 四ツの時分買てでも仕舞う方がよつ程宜い貧乏所帯の  
 中で焼芋を食ひせなぶらも丹精して此位にえたの今よ  
 なりて樂をしてい爲め當り近所の者を見たのでも此位な  
 事いしなくつちやアならねいと云の大概知れさうな者

じやアねいか夫も聞かねい振りをしてありや不宜いかと  
 思て二長町當りへ行て乞食役者で夢中なる車屋の爲の  
 野郎が生白いのよ食ひ込みやがつて一所にしてくれのお  
 とつさんだつても何か出来だらりの只居すとも宜い心や  
 アねいかの早くお正月又なつたら誰さんと遊ぶのと錢を  
 遣うのとほつ附き歩行くのを商買よえてゐる様な事を此  
 せち辛い世界で口が濡らされると思ふかど無理の様な道  
 理の様な痛し痒し否とも言ひれす否でないとも言ひ兼る  
 漸得心して權的の奉公をする極た處が米を食ふ蟲が澤  
 山内よ居るからさう云うちにもじつとえちやア居られな  
 い直よ米を買う小遣ひが入ると言た處が早速旦那口が有  
 ると云譯に往かねいから據無く聞庵へむぐり込む處の同



じ様もたんと給金を取る口がほしい仕度金が出るなら猶  
結構勤め方が樂で給金の外も物をまこむ買て呉れるのが  
宜いと望む了箇の相替らないでも今の權妻の品數の三通  
りの差別あり一ッの先き往き一ッの圍ひ一ッの呼ひ揚げ  
其給金の一箇月貳圓より貳圓五十錢三圓以上拾四五圓迄  
を以て最上とすれ共先の三圓より五六圓の處の通來の處  
なり拾四五圓以上の品もないといひないの夫の相對の  
約束で表向き閨庵口の處の百も一ッもない話なれ共西  
洋人より五六圓以上貳三十圓乃至五六十圓事よ寄れば百  
圓内外の物もないといひ難し其外琉球人及び支那人の  
三四圓より五六圓を以て留りとて多分の給金を出す事  
なし閨庵も於てと御規則の手續料の給金の十分の一ッ

を主人と奉公人と兩方から取る筈あれ共夫の堅氣乳母女  
中飯炊權助の類よとして誰が何時極るともあぐ市中一般よ  
權妻の給金の壹圓に附て二十五錢つゝを雙方より取る事  
よなりたり而して一圓廿五錢の手續料を其極た月一月丈  
け取りで濟ます者もほり又或の證文の書き替えと名を附  
けて二月目も取り又三月目迄取る者も有るが夫の風  
の悪み閨庵で奉公人も亦事馴れない者がさまかされる事  
なり右壹圓の給金に附き廿五錢の事も御定りの外の内證  
事よて別段奉公人の周旋も元手が入て有ると云譯でいな  
いから若極らないといふ一文もならない次第故手續料は是  
々で負けて呉れと言へば負ける事もほり又一月何程の給  
金と定め置て其半月分の給金を渡して十五日の間極める



事もゆり先づ奉公人の方では是々の口が有るなら世話を  
して呉れと頼み込むとこの某と其奉公人の宿所番號を  
帳面と書き留め置く又抱へる方では是々の女が有るの無い  
かと年頃恰好銘々の好むを云と帳面を繰り返して取り調  
べ是々の者が有りませすが思召が有るなら近所なれば直よ  
呼びよ遣りて見せ遠方なれば其日か明る日の朝も沙汰を  
して置いて翌日の第何時と刻限を定めて閨庵の宅で目見を  
させる事幾人でも其時より有る丈の女を連を來るなり又我  
見世の帳面に其旦那から注文の品がない時より閨庵の番  
頭及び手引き婆が仲間の所へ觸れ込で其注文の女を待合  
茶屋の船宿の様な所へ大勢集めて目見をさせる此時も極  
るのいたつた一人外の者の遠方から出掛けて來て損料着

物の代をはまり込む者もわり借り着をえてゆき丈の合の  
なひのを無理に着込み利さへ其着物汚したのを心配し  
て歸る者もあり其日の往來の車代を出す客もあり出さな  
い客もあり是の其時より始から極め次第なり上といふ園ひ  
どの奉公人の宅へ旦那の出掛るか別宅を所持して置く  
を云先き往きとい旦那の許へ往て毎日其側より居るを云呼  
び揚げとい一月より三度とか四度とか日曜とか土曜とか三  
日目とか隔日とか毎日とか双方の都合次第で仲宿へ女が  
出て來る旦那も亦其日を樂みよ往て逢う事なり是の大體  
園庵の家より呼び寄る者を多しとす此日の入用の女を呼び  
よ遣るより其時より使ひよ行く者へ何程か心附けて遣り其  
宿元への是も相應よ茶代座料を置く事と去て有り其高の



晝間ひるま拾錢しちせんより二十五錢にじゅうごせん或あるの三十錢さんじゅうせん五十錢ごじゅうせん夜よるの泊とまりり込こみ  
 の拾二錢しちにせん五厘ごりんより以上いじやう四五十錢しじゅうごせんに至いたるを通常つうじょうとす飲のみ食く  
 ひの品しなの客きやくと女おんなとの望のぞみ次第しだいで別べつの勘定かんでいなるなり而しかし  
 て圍かこひも呼よび揚あげも先まき往いきも其給金そのくわん高たかい皆みな其女そのおんなの等級とうじやう  
 次第しだいで同おなじ様さまなりされば先まき往いきも其給金そのくわん高たかい毎日まいにちの事こと故澤山こさくざんの給くわん  
 金きんで宜いい呼よび揚あげ圍かこひの度數どすうが少せうひから給金くわんも少せうくて宜い  
 からうと思おもひれるが左ひだりも非あらず何なにれも奉公人ほうこうにんと主人しゅじん方かたとよ  
 都合ごうあつの有ある事ことまで呼よび揚あげの者ものの三倍さんばいの給金くわんを取とりても  
 往いき切きりよの成なり難がたし何なにんとなれば我家わがいえが母一人ははひとりまで夫おとこ  
 も病人びやうにんだとか極年寄ごくねしよだとか或あるの家内かないが大勢おほせで暮くし方が澤た  
 山入さんいりる者ものの幾いく人も旦那だんなを取とりて御茶おんちやを濁にごす故ゆゑ一人ひとりの旦那だんな  
 買かひ切きられての甚はなはだ迷惑めいわくなりされば呼よび揚あげと云いふ大體たいたい

出でる日ひを色いろ々に操くり合あて旦那だんなを大勢おほせ取るを常つねとす先まき往い  
 きの者ものの別段べつだんも内うちも困こまらないが其當人そのたうにんが居ゐれば當人たうにんの食く  
 ひ扶持しほぢ小遣こづか丈だけの足たりなく又また嫁よめの有あるとか嫁よめの來きて  
 あるとの奉公ほうこうに出でべき者ものの内うちに居ゐて兎角とくかく嫁よめの方かたで邪よこしま  
 魔まにそると云い様さまなのや又またの親おやの若わかくて手足てあしの達者たつしや仕送しやうたく  
 りの給金くわんさへわれば娘むすめの居ゐない方かたの狭せまい内うちで却かへつて都合ごうあつ  
 が宜いいと只ただ一人ひとりの口くちを減へらひの趣意しゆいにするありされば  
 先まき往いきの者ものの少せうし計はかり給金くわんを増まされても呼よび揚あげで  
 迷惑めいわくなり圍かこひといふの先まきへ出でして置おくの親おや々々が心こころ  
 配ばいなり度々たゞたゞ呼よび出でしたに來こられて近所きんじよ傍あたりへ外聞ぐわいぶんが惡わるいと  
 云い世間よこしま飾かざりの子煩悩こぼんなんな親おやがする事こと又また内うちへも置おけず呼よび揚あ  
 げでは長ながい事ことになれば不自由ふじゆうな店々たなの番頭ばんとうや内うちのやかま



しい者が内證で世話をして置く者或は我儘勝手な女の先  
 きの内なごへ往てのめられないで我家とすべき住居の  
 なき者なごなり斯の如く夫々抱へる方でも抱へられる方  
 でも夫々の都合が有るによりて給金の高に拘へらず呼揚  
 先往國右三通りを思ひくに申し込ひなり其内年の若き女  
 の親兄弟の言ひなり放題故悪い腰持があれは途中にて不  
 勤めをする者多しといつて廿五六より上の女の他人の口  
 に乗てするのではない自分の了簡で其商法をする位だか  
 ら何れすれ枯しの品なる故中々以てなま中に旦那の手に  
 始末の出来る譯に非ず大體の一二度位で一月の分を蹴倒  
 される者ど知るべし去り乍ら証文に何と書てもまさか  
 權妻にして抱兼をした者に二圓三圓の給金を彼是云ふ時

の却て我名前も拘へる筋よなるから是の間の悪い事と  
 諦めて仕舞のを見込てふてくさる女多し而して思ひの外  
 よ人のよいのの慈者揚りなり是は何と言ても慈と云頼み  
 がある故多く權の世渡りを玄ないから世間摺れざるのみ  
 ならず表向きのご迄も慈で飯を食ふと云名代で清元の  
 名札を出すとか一節だとか葉唄だとか一方の逃げ道を  
 拵て置くから人も其氣で妾暮しとの氣が附かず自分も世  
 間へさう唱ひて有るから若し旦那勤め振りが悪い時の  
 給金よこだわつてぐづ言のれる時の近所隣へも見つと  
 もない云所から其極り月丈の所にするける者少し然れ  
 共座敷へ出て居ない時が多し居ても口が掛て来る客の方  
 でも成丈け内々よして出這入りを玄なくつちやアならな



いから兎角窮屈で面白からず因て我内へ連れ込て置くが  
 宜しけれ共素人と遺て旦那の立ち廻り其外食ひ物の好み  
 着る物の品柄等何れも附けても眼が明て居るから野暮をそ  
 ると只金づく計りで旦那を大事よせざる故物馴れざる  
 木年人よの素人の方が氣樂なるべし極端抜けた者よの錢  
 の遣ひ振り其外何れも寄らず意氣よそれば意氣丈けの事不  
 意氣よそれば不意氣丈けの事罰利生が有るから腕よ道者  
 な覺えわれれば藝者揚り程否となく卑劣なく頼母しき者の  
 なしと是迄の所の權妻上の規則法式計りを書きましたか  
 ら御覽遊ばそ方よの此道の手續さの相分る様な者の竹天  
 子が持前の滑稽道よの背き升から賊よ箇様な事の荷物よ  
 なりて否で否でならないが只洒落た計りでの其筋の事が

分明ならず其筋の事を並べ立てれり右の通りの仕合故此  
 度丈けの處にお笑ひの麻を御預りとして急度封印仕り置  
 き候間此次ぎの巻に於てお埋め合せの段のたつぶり仕り  
 外故と御説を申よりは是から先さか彌權妻と且的の陸言  
 及び千話口舌種々雑多の内幕に取り掛る處で御覽の如く  
 此篇の入合ひ時と相成り候間止む事を得ず據なく是非に  
 及ばば何んともし難く一先づ結局と仕候畢御退屈様で御  
 座い

明治十二年十月廿五日出板御届

○一冊定價金五錢 ○十冊前金四十五錢 ○廿冊前金八十四錢  
 但遠國の此外郵便税申受候又郵便爲替にて代價御送りの節内神田郵  
 便局當ては御振り出し願上候○前金相切れ候共御斷無之内の引續差上申  
 候猶又郵便局無之地の持込税別一錢申受候





總生 寬編輯

# 滑稽演說會

第四十八卷

四十六號の續々 毎月五日二十日發兌  
○娼妓買ひ秘傳の大演說

明治十三年十一月五日發兌

竹矢堂

## ○滑稽演說會合本

自一號 至十三號

自十四號 至廿六號

右何れも一冊定價六十五錢外  
郵便税一冊ニ付六錢ニ御座候

東京神田區錦町壹丁目六番地

編輯兼 事務主管 總生 寬

飯田登久

出版人 飯田登久

## 新規賣捌所

相州横須賀 信州長野

大塚 靜喜 小坪屋 喜太郎

上州高崎 高知縣佐川本町

井上公道 上村 浪次

## ○別段の廣告

滑稽演說會并々毎月十五日發兌の新作物共御蔭を以澤山賣捌々相成  
千萬難有奉存候因て右御禮の爲め且つ竹矢堂より別段郵便取り遣  
り御馴染の爲め詩歌川柳ごゝ一文章何々寄らる御投寄下され候ハ  
高案妙作の分へ評語と批點とを加えて演說會と月々の新作物へ附録  
仕べく候間續々御投寄之程偏々奉願候但し新聞原稿開き封まして無  
税よて御送り下されたく候

總生 寬 再拜



○人間皆入用 一册拾錢 一月十五日發兌

右の凡そ此世界に在る人の皆肝心の入用物故馬鹿も遣ひ方よりて直又利口もなり貧乏も方よりて忽ち多樂福長者となる方法を委く書き著したる人間第一入用の珍作也

○よん處さし 一册拾錢 十二月十五日發兌

此書の種々新作物の中は於ても亦別段と思ひ寄りざる事のよん處なき事を述べたる奇説なり

○變妙百物語 一册拾錢 十一月十五日發兌

右の現今又在て見難く聞難く知り難く言ひ難き人々の身の上市の理由を鑿り穿ち一々奥の奥を掘め新の事を盡したる變妙不思議の書なり

○世海乗合船 一册拾錢 十月十五日發兌

右の上天子より下食乞鷹板りに至るまで一身の規則となし一生の心得と去て世を渡るべき道理に於て造物主直傳の真意を承けて説き著したる奇中の奇書なり

○滑稽政談上卷 一册拾錢 本年九月十五日發兌

右の明治の代今日の政事向きよ於て大目的ととへる方略古今無類前賢未發の新説なり

○安本丹樂經 一册三錢五厘 本年十一月五日發兌

右は明治世界の事に於て言ひ難き處を言ひ盡したる現今穴搜しの新作として之を讀めば直よカ、ポコとやり出せる經文なり

總生 滑稽演說會第四十八卷 (四十六號の續き) 壹岐名人

娼妓買ひの秘傳大演說 八百萬の御神の氏子たる者をして國會請願又志し有る者 千金丹を飲むと飲まざると又拘りらす源平藤橘諸姓の人 何れも通人となり粹となり苦勞人となり達者ものとなり 夫者となりて女の子可愛がられ質見世の久松が如く八 百屋の半兵衛が如く夕霧の伊左衛門が如く小紫の權八が 如く阿古屋が景清の如くか七の吉三が如く所青山の鈴木 主水が如く關謙之が新橋の地廻りに於るが如く石井の翁 が紀の國密柑船に於るが如く後藤國手が潮來出島の引き 語りよ於るが如く風外老人が如く高島屋の假聲よ於るが如く



竹天子が相摸の國の住人登庸に於るが如く岩崎好正の編輯長の假名前目を以て禁獄一年の洒落の罪に於るが如く益子が新富座の劇評に於るが如くいろは大人の猫々社會に於るが如く成島氏が閨房の勞れに於るが如く福地子が御用の幅利きに於るが如く小西甚さんが熱心に於るが如く洋銀相場の引き揚げに於るが如く人の意表に出で世の愛願を受る様と色男の神より托宣を蒙りて書き出したる處なかく以て人間無上の歡樂たる一大要點の指南なれば一冊五錢の紙數表紙共十三四枚位の物一部にて成る丈けの相濟したき心得なれ共實以て左様参り兼ね候も附き彌此篇に於て其奥義を説き明したき所存なれ共色男の數も亦一様ならず士あり町人あり堅氣あり氣樂あり若い者あり

り年寄あり美男あり醜男あり金持あり一文無しあり氣取り家あり質撲ありセツカチありノロマあり腹立上戸泣上戸笑上戸あり朝寝坊あり晝寝あり首張りあり早起きあり理窟家あり滑稽風あり德行あり顔淵関子竊も宜くと云人あり是の風を語れば彼の事が言ひ残り夫の譯を演れば何の筋が取り落ちちよなる何れ残らず演説する事能はざる故又次號又次號と申して此暮向きの御忙繁中何ば萬事又御都合よく此内の金持ちで際拂ひの御忙繁中何ば萬事仕舞ふてモウ此様な正月の様なれごいらが在所の今頃が合戦最中と野崎の久作が久松の暇を取ら來る時の文句同様極りの附て有る事と萬々伺ひ上げ奉ると雖も今頃が合戦最中と云近所隣様方の御振り合ひも對しても兎



角御事多さうと遊ばされずんば有るべりらざる浮世の義  
理人間の交際上と随ひ先々餘り長いもの短日の折柄感心  
仕らざる事と存じ奉り候まゝ一言として士農工商の情も  
叶ひ一句として神儒佛三道及び老莊一派耶蘇舊新猶太回  
教希臘諸宗の旨も合一辭として君主專治君民同治貴顯  
專治合衆政治の趣意も適當る注の戀も上下の隔てなく心  
意氣の存する所真情の發する所を演べたる都々一の文句  
の神戸の珍猫庵先生通稱の田島常チャンの名作すねて歸  
ると羽織を着ても思ひさらぬ胸の内又古い葉唄の詞も  
も羽織隠して袖引留めてごうでも今日行んすかと言ひ  
つゝ立てれんじ窓障子細目も引き明てア見やまやんせ  
此雪も兼て逢ひたい呼びたいと思ひ思ひれ揚る二階のト

ンくくの梯の段もトンくの二ツを一ツと詰め一足飛び  
引き附けの座敷へ通るの裏初會まだういゝしき時れ事行  
なり部屋へ入らんとすれば一寸お待ち下さあましと中ご  
ん又聲をうけられ無官の太夫が御座船も乗り後れて須磨  
の浦を急ぐ處も熊谷の次郎がオーイ親父どの其金こつ  
ちへかしてくれと聲を限り思すたゝ千本松よさし掛る  
伊賀越の十兵衛が平作も追ひ附られたよりも肚胸を突て  
そんならモウ部屋に塞がつて居るのかと引き返して脇の  
小座敷も仲座をしてゐるの幕の明てゐる時もちよいと覗  
かうとする芝居の中よて高土間當りの明てゐる櫛へ中腰  
を掛けさせられた同様の始末柄是のテッキリ夫が來たの  
かあれが歸らず居るのかと愚痴を邪推の二筋も心のも



やくや居る溜れずやつぱり次號へ廻されるかど歎息と恍  
慨を抱合の分拆最中オヤよく來なましたの今日も誰さん  
とぬしのうのさをしておりんしたのと云のか客筋の時の  
事ッチの身体ハコッチの物主が風邪引きや共難儀と云  
様な間柄又至りて黙て這入りて黙て居るコッチも黙て  
煙草を吸むなぜそんなら否な顔をして居なまそ人の心も  
知りいせんでと聞き果てない内又邪見な音をさしてホッ  
をはたき今日ハア歸らう年の暮丈け有て大分御事多う  
煤取りの芥と一所又掃き出されねい内と立ち掛るをッ  
とも何とも言ひないで其手へ熱い涙をこぼしながら細い  
手で擦み留める勤めするのもお前も逢を待た客の機嫌  
取ると是れも神戸の末都塾屋さんが新作通り又引き替えて

切り見せの婦さん小格子の苦しがり連中の甲斐國谷村の  
小侯先生の名ハ有爲舎さんでも草津の湯でもどしが  
病の治りやせぬよりモウ一倍きたなおかしい狂歌又曰く  
地獄から附て來りと観音が婆で受けたる熱湯の責とハ  
穿ちの最上さすがの竹天子も三舎を避る手際の證據ハ人  
目を隠す格子先互見かわす顔と顔眼又持つ涙袖ぬれて  
エ、意地悪るな火の用心と更て逢ふ夜の葉唄の文句苦勞  
又苦勞の末と末若しや來たかと思見世先へ寐巻の儘も起  
巻きよも廣袖のごてらハ二子木綿又毛縞子の襟袖口洗ひ  
晒して中形の跡ハ底至り又探し當て兼る程はげちよろけ  
紫の唐縮緬ハ汚れくさりてコヒ茶色の光りを顯ハし氣の  
なさ相な顔をしてこなたも同じ素ぎてら一寒木綿の手綱



染の夕雨も逢た芋穀の如くなる三尺一ツも内懐から手を出してカマス煙草入れ中の怪しきヘタンコ物粉さへ最早しやくひ切て袂屑をつまんで飲む気味の悪い兄イが却て製食ふ蟲の好き好かれ其日くの手間賃を入れ揚る職人仕業師一二銭の取前から拾ひ集める車引きの若衆及び蕎麥屋の擔ぎ酒屋の樽拾ひ米舂き男湯屋の三ヤン醬油屋者煉瓦焼き馬方船人を客とする宿場の飯盛りチイさんも船附き河岸場の勤め振りも只さへ軽い財布なるをいぼし通ふ其内よの胸へ拳固を以てぐりくを二ツ拵へ今も昔も頬冠りの眼を出し鼻を半分見せ其全面を顯のさずと雖も早くとも夫と内と外咄す咄も立番見世の者の眼を忍び揚れと言て呉れるの有難いの今朝も今朝とてアノ算段漸く無理

なるをして立て切たのが埋らねい爲め見世へも面を出されいて空病氣を遣てゐると云じやアねい己の事じやア内証でも眼よ角を立てゐるの二階のおぼさん仲ごん迄今日此頃代りに這入て来やがつてこつどらの譯も知らねい癖よ一所よ成てぐづされるも爰の内よ居る時の仕方おねい住と替えと言た處が此借金玄やア急よおつ附く譯けじやアなし一月や二月おれが足を遠くした處が今どなつちやア何の足しよもならねい計りなら宜いが手前が郵便をのべつよよこす使屋が来る来られるおれハ猶更の事する仕事さへ手よ附かねい處へ友達よ玄やくられる鼻取りさんよア外よ足があるのステッキがあるのと言のれりやア糞落ち附きよ落ち附てゐる譯もいかずヨモヤ



くと勘平がお袋じやアねいの思てもお前がお輕坊の様  
思て呉れるのの呉れねいの當てよならねいのらごんな  
あんべいのと格子へ立ちやア歸るのが否よなつて終上り  
込む朝よなりやアマダ早いと思てゐる處へお前がそん  
な遅かアねいと云ので腰が奇留して見世の直しよ  
あるの成ねいのと幾度も催促されるかの痛は障らやア  
ふん流す敵き分けの玉を十箇てもおれが二晩歸らず居  
りやアごんな客な取り物をしてめちやの費奉公内  
へ歸た處が眼氣の残る仕事の間の闕くぼんやりした上  
ひよろくのしを掛け天保壹枚の融通も留た今夜の寸方だ  
からと云を半分聞かぬ内夫のさうでも今頃よ本所の番場  
迄歸すわたしよりも歸るに前の方が餘程邪見だよいつ迄

そんな事を言たつてもいつそんなら顔を見せねい方が  
宜よごうせお前やぶれかぶれだよ洋犬よ食ひ附かれるも  
馬車よ乗て怪我もするも違た事いねい仕舞ひよやアごう  
せ抜け出すより外いねいよ捕て屯へ引れて行れたつても  
まさか懲役よやアないねいサアごうするんだ揚てお仕舞  
ひたらよと跡の何やら聞き取れぬ言詞の末よコックと破  
れ屏風を立て廻の油揚蒲團の油臭さの年忘よも年王よ  
も取り替た事の無い枕紙今戸焼の火入れの縁の闕けた煙  
草盆よ取り添て來るの日光湯本名物の楠細工眞鍮のひ  
しげた煙管よ澤草紙をようく算段してまよぼく這入る相  
方の貧乏女郎始終病院の厄介検査の日よ歸た例のない瘡  
の間屋御し並み一晚よして鼻を取り二晩よして手足を奪



ひ三日よして惣身を眞黒の腸の如くよし一週間よして一  
家一孫子孫を片輪者よして未永却之を惱まし生な  
がら畜生道へ引き入れ化物社会へ籍を送らせる離れ技を  
熟練考たる手餘り者見た計りでも三日位食ひ物お疎いと  
いふ様な代物もあり又静岡の東草深町惣張徳助さん事本  
名の増田の富チヤンの御名吟又曰く一同御客酔如狂酔後  
猶傾酒幾筋娼妓能知休業日勘看演劇早朝行モシ旦那久し  
振りで島原お明さましたお運てつておくんなどいなア  
サ此次さの日曜じやアいやですよ明日でそよ皆一所よさ  
二階のお伯さんと座敷のアレと仲殿と立番さんと内の藝  
者衆とサあつちのお客が何と言つてもおまはんが急度往  
くとしておくんははいあたたらおくんははいな寐た振りを

えちやア否ですよオヤほんとお休みそんなら温厚しく  
して待てておくんはいよちよいとあつちのお客の處  
を廻りて來ますからと立れちやア種すりの形なしマア待  
なせい急度出掛るよ出掛るよ違ひねい正又出掛るよ聊違  
背之無く候先々下又居やいと言ば居やいのう否よ若松  
屋なんぞを氣取り返ますとも宜いからさ宜からくて御散  
財筋を勤め込め込めるよやア閉口まないでもないが壽三郎と  
鑒定した處の感心感心の御賞典として御出馬の宜いが  
淡路の廣石の御方別號嵐月さん事福島君の狂歌よも影法  
師の長き暇の歸り道短き日脚急く冬空と此短日よ多用の  
中芝居見物も餘まり氣樂らしいえやアねいか又あんな事  
を言て忙がしいもないもんでばよ人並らしく土曜の明日



何の日です。其爲め毎日午前九時とやらから御役所へ入らつゝまらる。じやアありまへんか。宜よそんな代言風も言はずとも急度参り奉ると見留印を押すと損をえたり誤たりする御念の入る客もあり雪と名を替へ氷でさへも二度の勤めも身を削ると大きな子のあるの鑑札を受けるの亭主の爲めもあり月分が浮氣ふのもあり因果商賣業な事よ一通して止めやらないの乞食も女郎言ひた放題の事を言ひ晝寝をして宜い客をえびり込て好きな物を買ひせ好い人を呼んで勝手よ樂みを表向きです。渡世好た同士で夫婦もなつてさへ邪見だく邪見だお前お容で來るどきや斯うじやないど何かも附けてお互ひもあらくまを拾ひ合て喧嘩口論誰がふんなオマンチンと一所もなつ

て貧乏所帯を張てゐるやつが有るものか誰がそんなだば沙魚を嫌よして稼く間抜けが有るものか出て行くなら勝手よ出て行け。行かなくてごうするものか。ごうせ汚れた此身体立派なかいらんよなつて見せる四十迄の威張て家業が出来来る女の出世の氏素性もやア拘りねい。をきやアのれ玉の興が聞てあきれら豆や枝豆王子や王子千金糖の功能とごなりて歩行く奴位が宜い加減な鉢合せだらう。休とく言てをくれこんなものでも八王子の留チャンもやア。又夫を言ひ出まやアがると立廻りの末が二度目も三度目も泥氷よはまり込て平氣な顔をするのもわり毎度上てを世話よあると遠火で程よく焼く女房の猶更の事只の色戀よりも我身一生を任せる夫が浮氣をすれば其心配のどの



位遠火で程よく所の地火焼きの黒焦げもまたいけれど  
何は男女同権でも女の男と同じ様も権男を持つと云譯も  
も行の何といつても一目置るざるを得ざるの表を張  
り商買をする諸官省へ勤めをして月給を取り一家の暮し  
方をするの宿六先生あるが故よ言ぬの言ふも勝る嫌  
妬の胸をさそりてをいらんよ始めてお目も掛り升が私  
の主水が妻の何と申者御縁が有て夫があなたへ参り升の  
も折位くわんの事ふれば男の例さいらん方のお呼びなざる  
のがを勤めの事けして何共思ひません此程市中の替女  
歌も二人子供の有る其中で今日もあすも通ひ詰めわ  
しが女房で焼の何の申譯で御座いません鈴木の家  
子細有てわたし諸共夫婦養子是非立てませねば養父へ對

して義理も有り譯も有り自分の家で御座い升れば假令親  
子三人が三度の御膳を一遍としてオヤマア私とした事が  
つひ陰氣な否な事をお聞せ申まして誠もアどう致しま  
せう人様のおいらん方なんぞの内証のお楽しみとか宜い人  
とかお有て夫の大体の人よ誠を明すものでない皆偽  
りの失敬な事を御免なさいよ比翼塚の事や今度の品川樓  
の盛糸さんとかのお話を聞きましてもお互ひと思ひ思ひ  
れする時の素人よりも餘程情が深いとやら御覽じませ此  
通り香中へ取つ附く膝へ揚るほんよ子持の色氣のない者  
で御座い升おつかさん今御歸りよなり升から少しお遊  
びをしてお出なさいそんなまうるさくおとつさん  
よアノかとのさんもうか休み遊ばしたから御目覺え



ならないさうだからか土産のかつかさんがいつもの御見  
世で風車でもお張り子の虎でもオヤか馬がよいの夫も上  
けまそ。さうぞおとなしく。さて下さい是の御面倒様なら  
御仲間の衆から郵便で御座升ごんな御用か存ませんが。お  
跡を御覽な入れて下さいまし又坊やの人様の前でそんな  
事を御聞きなさるもので御座いませんか前ののが羽織の  
おとつさんが高い所へお仕舞ひをして有り升お袴も一所  
よして有り升今度青山の伯父さんの處へ参り升時着せて  
上げますか内はわぼアヤが御留主番をして居り升がら  
車はの乗りないとせか草臥ならおぶつて上げ升私のか  
酒の減は不調法で御座升から頂戴致しましたも御同様と  
うぞ御心配下さい升なふらふ事ならぼせとし旦那申上

げたいとも御座升が折角お鎮まりの處で又例の御疝氣  
までお障りでの何で御座升からこんな厄介を連れまし  
たからそろく参り升あなたもお岩様へでもお参の時よ  
いお尋ね下さいましとんだ。坊やお内へ参りましよ  
と油氣の扱けた丸鬚よ襦から綿の見ゆる着物も元の互  
結納を媒人の方より取り替ひし三々九度の高砂や四海波  
風穩かよ諸ひ納めし友白髪此翼連理の盟さへ今仇ふれ  
乳のみ子と四ッよなる子を我手一ッ何をたつまよ世の渡  
る内職事の細さが上よ洗ひ張やら飯の事水汲み買ひ物何  
やかや貧さよ隙なき喩の如くいつを死んだら此苦の有る  
まいどの言ひ生ひ先き有る子をいかみせんかゝる愛目も  
前生の約束事と諦めても拵る掛けし接ぎ物の針を止めて



一車ホロリと落す折も折遠く聞ゆる葉唄の一ふし秋の夜  
 の長いものといま丸な月見ぬ人の心かも更けて待てど  
 も来ぬ人の音するもの鐘計りかぞふる指のねつ起きつ  
 と聞き終らぬも時も時けさの雨よしのつぼりと又居續け  
 よ永い日を短かく暮らす床の内紙を引き裂き眉毛を隠し  
 モシこちの人うるせいと言つたら宜い加減よしねいな若  
 太夫と民中が悪るじやれ又酒を飲ましたがるよやア困る  
 こつちより自分か何れも浮れておれが寐て仕舞てせいアノ  
 通り小供を見た様あ事をして面白がる餘り罪のなさ過る  
 よやアおかしくて腹も立てねいお前もやつぱり其通が宜  
 い加減よ酔ひして置きやア宜いのよ兎角おふり返させる  
 から楷子の段で由良の助を氣取る若太が太郎よごらやら

似てゐるゐら不思議だ夫のらまじめ又拵へ込んで居る内  
 証の前へ来て千金丹の風を巻る内へ歸でからも駒子附て  
 格子戸を明けあがら梅の飛ぶ櫻の枯るゝ世の中は何とて  
 女房つれなかるらんと於濱よ食ひついたとかいつておれ  
 の方へ尻が来る騒ぎアレ何ですな。食ひついたんじやア  
 有りまいんよおがえ附いたのですッサわたしんおがえ附  
 かないからさつきの新次郎と小薬が小田原へ行た跡で言  
 ひ號けの娘がごうするかた聞かせあさいな。そんなよ骨惜  
 えを。まなくつてもサいや又讀むのよ勿體を附るよ。おま  
 ても讀まなけりやア御膳をたべさせないで又太夫衆を呼  
 びよ遣るよオヤ兵庫屋のるいチャヤがめたる日の春よ近  
 いとて老木の梅よ若やごてそろ。まほらしや。薫りゆかし



と待ちわびかねて篋啼きかける鶯の来てハ朝寝を起しけるホヅト又宜い喉だよわれで立つ方が猶宜いと来て居るのら鬼又金棒餘まり調子の宜いので竹天子なんぞも邪魔よされながら時よぬたくり込むとさ夫よしても堀川の芳親方が内々番頭より頼まれよと言つてアノ位言て呉れるのら今日又來るとも歸らねいヒヤア。なるめいアノ跡をお聞なさいよさりどの無短かな今帯めて行くわいな翌の朝はやアく起して上げまはアねサア紙入れを出しておくれ出直して來るよ來るよ違ひねいと言ふのよお前も身粧ひでも去て置きねいな皆湯又遣入で仕舞と言つて孝ごんが幾度と來たヒヤアねいか。宜いよわちきハまぶ風を引いてゐるから今日ハ休むおするよ雪を被て寝てゐる竹

を來てハ雀が揺り起すとなし事ヒヤアないもうちつとわちきが起さすよそつとして。たけば明りが附て仕舞うのよ何を此子の今頃歸て來たんだよご迄で買ひよいつたんだねいとじれつよさのハッ當りも惚れよ情からくだらない事の内よも其身其身よなつて見れば實よやるせなき事なりけり又もや漸く眞味の具合ハ大極の無極天地陰陽自らの人情の奥をた見せ申さんとして御覽の如く此篇の大結めとなれば又の御げんと申殘し參らせ候

明治十二年十月二十五日 出版御届

○一冊定價金五錢 ○十冊前金四十五錢 ○廿冊前金八十四錢  
但遠國ハ此外ハ郵便税中受候又郵便爲替にて代價御送りの節ハ内神田郵便局當てハ御振り出し願上候○前金相切れ候共御斷無之内ハ引續差上申候猶又郵便局無之地ハ持込税別ハ一錢中受候



○滑稽演說會合本

自一號 至十三號

一同

自十四號 至廿六號

右何れも一冊定價六十五錢外  
郵便税一冊二付六錢ニ御座候

東京神田區錦町壹丁目六番地

編輯兼 事務主 總 生 寬

飯 局 同所 竹 天 堂

出版人 同所 飯 田 登 久

新規賣捌所

相州 橫須賀	大塚 靜喜	上州 高崎	井上 公道
信州 長野	小柳屋 喜太郎	高知縣 佐川本町	上村 龜次
名古屋 大曾根坂下	松屋 本兵衛	參州 豊橋上傳馬町	錚々 舎

○別段の廣告

滑稽演說會并々毎月十五日發兌の新作物共御蔭を以澤山賣捌り相成  
千萬難有奉存候因てハ右御禮の爲め且つハ竹天堂より別段郵便取り遣  
り御馴染の爲め詩歌川柳ごハ一文章何れも寄らせ御投寄下され候ハハ  
高案妙作の分へ評語と批點とを加えて演說會と月々の新作物へ附録  
仕べく候間續々御投寄之程偏々奉願候但し新聞原稿開き封として無  
税にて御送り下されたく候

總生 寬 再拜



滑稽演說會合本

自一號 至十三號

自十四號 至廿六號

一同

右何れも一冊定價六十五錢外  
郵便税一冊ニ付六錢ニ御座候

東京神田區錦町壹丁目六番地  
編輯兼 總 生 寛  
事務主管

同所 同所 同所  
局 局 局  
竹 天 堂

同所 同所 同所  
出板人 飯 田 登 久

新規賣捌所

相州横須賀	大塚	靜喜	上州高崎	井上公道
信州長野	小樽屋	高太郎	高知縣佐川本町	村上公次
名古屋大曾根坂下	松屋	平兵衛	參州豊橋傳馬町	村々
				合

別段の廣告

滑稽演說會并又毎月十五日發兌の新作物共御座を以澤山賣捌り相成  
千萬難有奉存候因て右御禮の爲め且つ竹天堂又別段郵便取り遣  
り御馴染の爲め詩歌用脚さゝ一文章何れも寄らる御投寄下され候ハ  
高案妙作の分へ評語と批點とを加えて演說會と月々の新作物へ附録  
仕べく候間續々御投寄之程偏々奉願候但し新聞原稿開き封よして無  
税にて御送り下されたく候

總生 寛 再拜

定 時 刊 行

毎月五日廿日發兌

定價金五錢

滑稽演說會第四十九卷

總生 寛著 藝者買の秘傳の部

明治十三年十二月廿日發兌

竹 天 堂



○人間皆入用 一册拾錢 一月十五日發兌

右の凡そ此世界に在る人の皆肝心の入用物故馬鹿も遣ひ方より直りて直りて口より貧乏も方より忽ち多樂福長者となる方法を委く書き著したる人間第一入用の珍作也

○よん處ふし 一册拾錢 十二月十五日發兌

此書の種々新作物の中よ於ても亦別段よ思ひ奇らざる事のよん處なる事を述べたる奇説なり

○變妙百物語 一册拾錢 十一月十五日發兌

右の現今よ在て見難く聞難く知り難く言ひ難き人々の身の上の理由を鑿り穿ち一々奥の奥を窮め新の新を盡したる變妙不思議の書なり

○世海乗合船 一册拾錢 本年十月十五日發兌

右の上天子より下食乞薦被りよ至るまで一身の規則となし一生の心得とて世を渡るべき道理に於て造物主直傳の真意を承けて説き著したる奇中の奇書なり

○滑稽政談上卷 一册拾錢 本年九月十五日發兌

右の明治の代今日の政事向きよ於て大目的とぞへる方略古今無類前賢未發の新説あり

○安本丹樂經 定價三錢五厘 本年十一月五日發兌

○命のせんたく 一册拾錢 本年二月十五日發兌

○是非娛覽 一册拾錢 本年八月十五日發兌

總生 滑稽演說會第四十九卷

○藝者買ひ秘傳の部

鶴幕小郎坊

藝と言つても禮樂射御書數の六藝小通じたる孔門七十二弟子の類お非ず又藝よ遊ぶと云論語の藝お非ず故お文藝の藝よ非ず技藝の藝お非ず遊藝の藝おして第一三味線第二藤八拳柳拳今い古めかしいが薩摩拳或い蟲拳コイ〜〜供せ〜何を以て供えよ爰らお宜ろの種類を兼ね第三お非らざれごも白襟の婦さん株のせざる處ゆゑ踊を以て其次ぎとし其流名の聞ら坂東よ二通り彦三よ三津五郎中村藤間花柳の諸家第四い下方鼓太鼓横笛尺八法螺の貝喇吧の假聲〜イレ〜イレ狐の鳴聲〜〜〜東京兒洋犬猿々持前の猫猪々鴉のカア雀のチウ鳩のボウ鼠鳴きのチウ〜第五



總生寬著述廣告 每日新物 五十月 定價拾元

○人間啓入用 一冊拾錢 一月十五日發兌

右の凡そ此世界に在る人の皆肝心の入用物故馬鹿も遣ひ方によりて直に利口より貧乏もえ方によりて忽ち多樂福長者となる方法を委く書き著したる人間第一入用の珍作也

○よんん處さし 一冊拾錢 十二月十五日發兌

此書の種々新作物の中より亦別段よ思ひ奇らざる事のよんん處なる事を述べたる奇説なり

○愛妙百物語 一冊拾錢 本年一月十五日發兌

右の現今在て見難く聞難く知り難く言ひ難き人の身の上手の理由を聖り穿らんと其の奥を穿め難の事を盡したる愛妙不思議の書なり

○世海乗合船 一冊拾錢 本年十月十五日發兌

右の上天子より下食を薦げ入るに至るまで一身の規則となし一生の心得をえて世を渡るべき道理に於て造物主直傳の真意を承けて説き著したる奇中の奇書なり

○滑稽政談上卷 一冊拾錢 本年九月十五日發兌

右の明治の代今日の政事向きを於て大目的ととへる方略古今無類前賢未獲の奇説なり

○安本丹樂經 定價三錢五厘 本年十一月五日發兌

○命のせんたぐ 一冊拾錢 本年二月十五日發兌

○是非娛覽 一冊拾錢 本年八月十五日發兌

總生 滑稽演說會第四十九卷

○藝者買ひ秘傳の部

鴉幕小郎坊

藝と言つても禮樂射御書數の六藝に通じたる孔門七十二弟子の類も非ず又藝又遊ぶと云論語の藝も非ず故不文藝の藝も非ず技藝の藝も非ず遊藝の藝も非ず第一三味線第二藤八拳柳拳今い古めかしいが薩摩拳或ハ蟲拳コイ、供せ、何を以て供えよ爰ら、宜ろの種類を兼ね第三、非らざれども白襟の婦さん様、のせざる處ゆゑ、踊を以て其次ざとし其流名の、則ち坂東又二通り彦三、三津五郎、中村藤間、花柳の諸家第四、下方鼓太鼓、横笛尺八、法螺の貝、喇叭の假聲、へイレン、へイ狐の鳴聲、コン、鶏、東京兒、洋犬、猿、々々、持前の猫、猪、々、鴉、の、カ、ア、雀、の、チ、ウ、鳩、の、ボ、ウ、鼠、鳴、さ、の、チ、ウ、  
第五



の胡弓琴月琴木琴借金千金丹の賣聲第六の客の樽咄お  
座敷でやたら肴荒らしおまん、のバック付き残り物の脊  
負ひ込みの折詰よして飯も香の物もさらひ込みお客の分  
若い藝者の物をごまかして箱屋よ持たせ歸る時よ羽織の  
下へ隠し第七の芝居見物を勘め込み遠出を約束し河崎の  
大師西荒井王子の瀧堀切の菖蒲御臺場の網打江の島参詣  
金澤八景鎌倉見物伊豆箱根草津の湯治場日光行成田山  
芝又の帝釋お岩稻荷氷天宮清正公太郎稻荷三圍眞崎袖摺  
黒助等の紀伊の國の葉唄よ於て既よ其名を顯し或の不二  
詣金毘羅参り伊勢参宮播州遊び大和廻り蝦夷樺太琉球朝  
鮮臺灣呂宋唐天竺凡そ霜露の墜る所舟車の通ずる所鼻紙  
と枕の有る所への近所遠國の差別なく其散財の多少留主

宅へ手當の厚薄よ由て夜の終夜晝の終日天お在りての比  
翼の鳥地お在ての連理の枝與君相向轉相親。與君双棲共一  
身。願爲貞松千載古何思芳權一朝新。其口前お於て節操の有  
る事。の列女傳中其比なく女大學暗誦貞女不見。兩夫。忠臣不  
仕。二君。九天の上九地の下死なば諸共欠落の手を引き合ひ  
梅川忠チャンお俊傳へイそりや聞えても聞えないでもお  
言葉の御無理でも御尤でもそも逢ひかゝる始めより應來  
賃の高下およりて未の未迄言ひかゝし男の方で本問の  
身の上を語るるとも女の子の方で宜い加減よ調子を合せ  
旦那内へ歸ると本とよくさくし升よお袋が只やあましい  
事計り言て玉高お少いの御祝儀が何だの旦那を取れのあ  
なたの御座敷へ出ると歸る事を知らないの。外から掛て來



るのを否がるのと早く春着を拵へておくんなさらないと  
否事言り言のれ升のらさ下着迄新らしくしないと此八  
丈の皆が知て居升から長襦袢も色氣が是でそのら取替な  
いと極りが悪いんでサアね帯も出のさうしても此間見た  
のを買ておくんなさいな着替なれば古着屋の重さんが  
持て来た博多とアノサあれの方ど。どつちかの内でも宜ん  
ですが天頭の物もねイ柳橋のお軽さんのが宜じやア有り  
ませんか金無垢の薄い櫛の様なのよえてお呉なさいな何  
でもあの人や講武所の大鎌チャンの眞似をまてありやア  
笑のれいえないよ大鎌チャンと言へばアノ人の義太夫よ  
やア驚いゝ兼て評判の聞てゐたガアンなじやアあるめい  
と思たが藝者の藝じやアねいと云のの新橋の小みつ坊の

踊りか山姉の調子の宜いの實に猫々社會の第一等池の  
端の御前親方なと赤襟計り生捕るが龜の甲より何とや  
ら年の功の年の功丈の御膳上等藤八拳に於て大鎌の筋向  
ふの夫濱吉小供ながらも若太夫の仕込み丈け有て成島氏  
が權君二代目の樂助愛敬から顔を出てへイ今日と云の  
あの子の事柳橋のお酌の中でもお酌と言て恥かしくない。  
何でそねい極てゐるよ。おまこんが譽るののさうせとよし  
なんぞの様ふ藝の悪い顔のへチヤな。何をいふんだあ前  
の前じやアうつかり餘所の藝者の咄も出来ねいオヤお咄  
となさいくさんどお咄しなさい御咄し計りならよう御座  
いまそがね昨日も魚十のらごこへ入らしつたんです。サ。お  
言ひなさいお内へ歸たもないもんですよ。ちやんと知て居



升よ。オヤおかしい。又藤どん。おからかわれたな。藤どんじや  
 ア有りませんよ。そんならなぜ今日のお歸りなさると言つ  
 たんで。昨日脇へお出でなけりや。ア瓢亭へ入らしつたつ  
 ても宜いじや有ませんか。瓢亭のよししてくんねい。地内の彌  
 三郎の所でいつも一所なるから極りが悪いからだと云  
 の。彌三さんの所はお稽古さは是ら行くのにお客でさ。ア  
 ね。夫とも弱いお尻でも有り升なら無理もや。アお勤め申ま  
 せんから植半へ行させう。又そんな事を云是から向島へ  
 往たや。ア今夜の夜明しだ。夫よりや。アサツキさういつた通  
 り。又してアノ方間合して置て。ア。いけませんよ。否で  
 す。つさらね。そんな事をおつしやるとお時計を歸しません  
 よ。オ。おすまを通るの。講釋師の燕海先生じや。アねいか。オ

ヤさうですよ。ちよいとお呼びなさいな。モウ刻限あなるか  
 ら席へ出掛るんだらう。何れ晩おや。是非逢う約束だから。  
 晩の御約束のお白粉を附て西洋元服の燕海でせう。氣味の  
 悪い。又そんな下らない事を夫よりや。アさつきの北州の跡  
 をもう少し。やつて見ないな。否ですよ。お前さんの。ほんとお  
 風が悪いよ。人又何かやらしちや。ア節が疎いの手が足りな  
 いのと六ッかしい事計り言てもうお前さんの前じや。ア何  
 かもお廢しです。よし。おいらもいう事を聞かなけりや。ア早  
 蕨めからさし殺す。此上野。又隨へば活計歡樂心の儘かぶり  
 振る。否とな。ヨイ。ツ。家來共。ア。く待て。下さん。せ待て  
 と。彌抱かれて寝るか。お聞なないよ。三好屋の瀬口。似て  
 あるじや。有りませんか。あいつ。つ。つ。も。來るや。つ。だが。多賀



之丞の初花の方が別段宜い。源氏の仇も身を任せし常盤御  
 前が宜い手本ボーン。下らない所へドラを入るじやアねい  
 か助高屋の勝五郎のちつと受け取れねいが身を任せし常  
 盤と云所のよく癖を取たマア助高屋だの壽三郎だのと云  
 の竹天子がいつもやらかすが。わんまりひこい癖がない  
 から却て遣ひ悪いさうだ。こつちへ來たら何のお遣らさせ  
 なさいよ。ベラ坊ノイあんなやつより。おれの方がよつぽと  
 うめいもんだ左様さねい。お前さんの。あなたも能く似て  
 居升よ馬鹿を言いねい。今よおれの様な口席の役者が下る  
 んだ。此時襖を細目よ明けてお湯へた召し遊ばせお浴衣の  
 爰へ上げます。有難うござんすが旦那のモ少し御酔ひをお  
 醒し遊ばしてからが宜いとおつしやい。升から。ごなたでも

マアお先さへ少しも早く申して置させんと松源當りと  
 違て開花と大和の流行ッ子です。から大勢様ならばお座敷  
 を明けて置き升様よ致させます。藝者衆の小松さん。頼子さ  
 ん。繁八さん。お若い處で。小鎌さんと誰お致しま。升此間廣  
 めを致た子が御座います。わの日よ三人一所。お丸さんの  
 内から夫を掛けま。升か。とうでも宜い極た處が。貳三人あり  
 やア跡の見繕つてでも取り合してでも刺身の妻煎肴の附  
 け合せ。天頭敷さへ揃へば。アレ否です。よ。ろんな御笑談計り  
 皆一粒擲りな。んです。よ。山の手の方じやアさうかも知れね  
 いが。又悪ま。色口をオット。失敬。終色の出来。ないやつ。毒を  
 流し。さくなる。やつさ。あ。え。まり。お。出。來。遊。ば。し。過。ぎ。る。の。で。女  
 の子。除。け。ど。や。ら。の。且。那。様。の。お。し。や。色。じ。や。ア。笑。ひ。す。お。や。ア



居られません笑ひ玉へくいくら笑ひれても鹽花を振られ  
ても爰の内の酒でなけりやア酔た心持おしねいかも有  
難迷惑だらうお前の様な程の宜い女中が居るから何で  
も宜しう御座い升迎もあなたのお口おの被る人より訴訟  
入費償却すべしと云落着筋お漸なつたお前も聞て知るだ  
らうおアノ一件の明日の彌骨折振る舞ひせうせ大勢の座  
敷でハ藝者お洒落を言た處が杯の取り遣り又隙のないの  
で受けて呉れる相手もなし晨の事ハア兎角早く切り揚  
げて飲を直すより外ハない其時ハ又爰の親方が隠し藝十  
八番の勘進帳ハ田島象二先生も宜くと云ハ宜が中尾屋の  
隊長の處へ是非明日の午後二時頃から出張して呉れる様  
おは書をやつて貰ひていもんだイエ〜此間の様も遅く郵

便が往き升と往きませんおらの若い者を態々上げ升芝  
居町の御師匠さんハ葉唄の方じやア美佐吉さんと言て虎  
衛門さんの一番の御弟子なんださうで御座いまそアレが  
則ち藝ハ身を助ける程の何とやらで親人の沼口山民と云  
大造な學者先生其子だあらんな洒落た風だおなの〜あ  
物識りで頗る義氣の有る處あら明治の始めまだ學校と云  
者がない時分ハ吉原の京一の深山と云舊名主の宅を買て  
學校を始め洋學ハ佐藤幡郎青柳兄弟漢學ハ竹天子が四角  
な學者な頃右の人々を頼で教師となし其上ハ池田ハ目澤  
と云西洋漢法兼帯の醫者を招ぎ込み娼妓藝妓共ハ教育の  
道を開さる今仙洲樓の息子なんぞハ義太夫を語たり茶  
番狂言へ顔を出したりして折〜新聞お書られるが其頃の